

国際子ども図書館 の窓

子どもの本は
世界をつなぎ、
未来を拓く!

第15号
2015.9

表紙デザイン：熊谷 博人氏

【写真 国際子ども図書館の活動 平成26年4月～平成27年3月】



日本ペンクラブ共催講演会
「私が子ども時代に出会った本」
講師：浅田次郎氏
(平成26年4月19日)
p.82

電子展示会
「日本の子どもの文学—
国際子ども図書館所蔵資料で
見る歩み」公開
(平成26年4月23日)
p.81



講演会
「今日の絵本、明日の絵本—
希望のかたちを求めて」
講師：広松由希子氏
宮川健郎氏
(平成26年6月21日)
p.79

講演会

「子どもの探究活動と図書館の可能性」

講師：成田喜一郎氏

中村百合子氏

（平成26年7月6日）

p. 76



日本ペンクラブ共催講演会
シリーズ・いま、世界の子ども
の本は？（第8回）

「いま、スペイン語圏の子どもの
本は？」

講師：宇野和美氏

（平成26年10月11日）

p. 82

国際子ども図書館アーチ棟
建築風景

（平成26年6月20日撮影）

p. 84



はじめに



第15号では、平成26年4月から平成27年3月までの国際子ども図書館の活動を御紹介しています。平成26年度も、当館は近隣機関を始め国内外の関係機関とも連携し、積極的に国で唯一の児童書の専門図書館として、積極的に活動してまいりました。

平成26年度は、「日本の子どもの文学」を始めとする複数の展示会を開催したほか、電子展示会として、4月に「日本の子どもの文学」、6月には「中高生のための幕末明治の日本の歴史事典」をウェブ上で公開しました。さらに、日本ペンクラブ会長浅田次郎氏、ドイツの国民的な児童文学作家クラウス・コルドン氏をお招きして講演会を開催しました。おかげさまで、多くの方々に参加していただくことができました。

さて、平成27年6月、国際子ども図書館の新館（アーチ棟）の建設工事が竣工し、いよいよ9月からは、アーチ棟に児童書研究資料室が開室します。それに引き続き、既存棟（レンガ棟）の改修工事を平成27年度中に行い、中高生のための「調べものの部屋」及び日本の児童文学の歴史をたどる資料を手にとって御覧いただける「児童書ギャラリー」を開室します。当館は、新館完成を機に、来館者サービスを更に充実するとともに、全国で読書活動推進のために活動している方々の役に立つ図書館となることを目指して、インターネットなどを通じた情報発信や、児童書に関わるサービスに携わる方々をつなぐ活動にますます力を注いでいく所存です。皆様からの一層の御指導、御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年9月

国立国会図書館国際子ども図書館長 佐藤 毅彦



【調査・研究報告】

いま、スペイン語圏の子どもの本は	= 宇野 和美	3
ペルーの児童書事情	= 星野 由美	16
中東・中央アジアの児童書事情（出張報告）	= 山本 直樹	26

【ハイライト】

「子どもの読書活動推進支援計画 2015」を策定しました	= 国際子ども図書館	33
講演会「わたしの物語作法―「古き」ベルリンの若者たちの今」	= 企画協力課	36
クラウス・コルドンが描く時代の万華鏡	= 酒寄 進一	39
ドイツの子どもとクラウス・コルドン	= マライ・メントライン	45
平成26年度子ども読書連携フォーラム	= 児童サービス課	49
電子展示会「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」提供開始	= 児童サービス課	53
児童書検索に役立つデータベースの御紹介	= 資料情報課	54

【国際交流】

第80回国際図書館連盟（IFLA）年次大会報告	= 西尾 初紀	59
第34回 IBBY 世界大会に参加して	= 佐藤 毅彦	63
イタリア公共図書館における児童サービス	= 中島 尚子	65

【平成26年4月から平成27年3月までの主なできごと】	71
------------------------------------	----

【活動報告】	72
---------------	----

【数字で見る！国際子ども図書館】	85
-------------------------	----

【国際子ども図書館利用案内】	88
-----------------------	----

いま、スペイン語圏の子どもの本は

宇野 和美

スペイン語圏とは

スペイン語圏と聞いたとき、どこの国をイメージするだろうか。スペイン語は、スペイン以外に、ブラジルを除く中南米の約20カ国で話されていると言うとびっくりされることが多い。どの国もなじみが薄く、具体像が浮かびにくいからか、20もあるのかという驚きか。そこで、本題に入る前に、まずはこれらの国々の歴史や地理、文化のアウトラインの説明から始めたい。

ヨーロッパの西の端にあるスペインの一番の特徴は、常に文化の交差点だったということだ。古くは地中海経由で入ってきたローマを迎え、8世紀から15世紀にかけては北アフリカからアラブ人が来て、イスラム文化が栄えた。1492年にコロンブスが新世界に至った後は、中南米の植民地化へと乗りだした。さらに現在は、言葉が共通する中南米から多くの労働移民が入り、狭いところは14キロしかないジブラルタル海峡を渡ってくるアフリカからの不法移民は跡を絶たない。

歴史的には、1936年から1939年にかけての内戦も重要だ。戦後というと平和や民主主義を想像しがちだが、スペインの場合、内戦後の独裁期は、日本の戦前さながらの言論統制の時代であり、民主化するのは1975年のフランコ死後である。

またスペインでは、カタルーニャ語、バスク語、ガリシア語という公用語もあり、それぞれ別の文化圏を作っている。2013年の統計¹では、書籍における各言語の比率は、スペイン語が78.8%、カタルーニャ語が8.9%、ガリシア語とバスク語それぞれ1.6%である。スペインの書店に並ぶのは、スペイン語の本だけではないのだ。

中南米の約20カ国は、スペインの旧植民地を中心とする。しかし、熱帯から極地までカバーする大きな大陸には、コロンブスに発見され、入植者がやってくる以前から、多数の先住民族が住んでいた。植民地時代に三角貿易で連れてこられたアフ

¹ Ministerio de educación, cultura y deporte, *Panorámica de la edición española de libros 2013*, pp.29-31, Madrid

リカ系の人々もいて、地域により様々な比率で民族が混ざりあう混血文化が形成されている。19世紀にはどの国も独立を果たすが、資源や自然の豊かさや裏腹に内戦や独裁に苦しんできた国も多く、政情不安や貧困の問題は今も続いている。

地理的には遠いが、日本政府は100年前から中南米に移民を送りだし、1990年代からは入管法を改正して、その子孫である日系人を労働力として受け入れてきたという事実も頭に入れておきたい。

20世紀前半までのスペイン

これらの国々で、どのように児童文学は発展してきたのだろう。まずは、現代児童文学が始まる前の時代のスペインと中南米を、別々に一望してみよう。

1932年に「ここには奇妙なことに児童文学はなにもない」²とポール・アザールに評されたスペインだが、実は一歩ずつ遅れながらも、英独仏同様の発展を遂げてきた。ニューベリーに遅れること約半世紀、1798年には最初の児童雑誌 *Gaceta de los niños* が刊行された。ドイツ人の父を持つ作家フェルナン・カバリエーロ(Fernán Caballero, 1796-1877) は、1847年創刊の児童雑誌 *La educación pintoresca* に子ども向けの物語を執筆。採集したアンダルシア地方の昔話集を1874年に刊行し、そのうち6編は『すべいん・いたりあ童話集』³で読むことができる。

1876年には、初めての児童書出版社カリエハ(Calleja)書店が生まれた。スペイン版のチャップブックが誕生し、庶民の手にお話の本が渡るようになった。コロマ神父(Luis Coloma, 1851-1915)の『ねずみとおうさま』(*Ratón Pérez*, 石井桃子訳, 土方重巳 絵, 岩波書店, 1953)はこの頃の作品だ。イタリアのコロディの『ピノキオ』の後日譚である、バルトロツィ(Salvador Bartolozzi, 1881-1950)の『ピノチオの冒険』(*Pinocho*, 園武久 訳, 霞ヶ関書房, 1942)は、カリエハ書店から生まれた人気シリーズである。

20世紀に入ると児童雑誌が盛んになるが、これは日本の『赤い鳥』や『コドモノ

² 矢崎源九郎, 横山正矢 訳『本・子ども・大人』紀伊国屋書店, 1957, p.112

³ 世界童話全集4, 会田由 訳, 河出書房, 1951

クニ』の時代と重なる。内戦前の共和制の自由な風の中、セリアという女の子のシリーズで読者の絶大な支持を得たエレナ・フォルトウン (Elena Fortún, 1886-1952)、ナンセンスやユーモアの王と言われたアントニオロブレス (Antoniorrobles, 1895-1983) などが活躍した。カタルーニャでは、画家で作家のローラ・アングラーダ (Lola Anglada, 1896-1984) が素晴らしいイラストレーションを残し、その名は児童図書館の名にも冠されている。

しかし、これらの雑誌もそこから生まれた作品も、1936年の内戦勃発とともに姿を消した。二人の人気作家も亡命し、文化は分断される。

ここで、日本で児童書として親しまれてきた、この時代までの二つの文学作品について触れておきたい。一つは、今年が後編刊行400年にあたる古典、セルバンテス (Miguel de Cervantes, 1547-1616) の『ドン・キホーテ』 (*Don Quijote de la Mancha*, 1605, 1615) である。邦訳書は『鈍機翁冒険譚』(松居松葉 抄訳, 博文館) の書名で1893年に刊行されて以来、20種類以上のリライト、50種類近い版がある。これらの多くは英語からなされたようで、三島由紀夫の手によるものもあり、20世紀前半に数多く出版された児童全集のスペインの巻に盛んに収録された。スペイン語からの翻訳は、1951年刊の永田寛定訳が最初である。

もう一つは、ノーベル賞作家ファン・ラモン・ヒメネス (Juan Ramón Jiménez, 1881-1958) の『プラテロとわたし』 (*Platero y yo*) だ。1917年に完全版が刊行されたこの作品は、ロバとのやりとりの中で、アンダルシアのひなびた村の日々を描いた、世界中に愛読者を持つ散文詩だが、1960年から5種の翻訳が出ている。2011年の震災後に、雑誌で著名な作家にとりあげられて話題になった⁴。



『ねずみとおうさま』
コロマ神父 文, 土方重巳 絵
石井桃子 訳, 岩波書店, 1953

⁴ 1960年刊行は、『少年少女世界文学全集38 南欧・東欧編』(永田寛 訳, 講談社)。現在入手可能な版は、『プラテロとわたし』(伊藤武好・百合子 訳, 理論社, 2011)。

20世紀前半までの中南米

1960年代以降、中南米は新しい小説によって世界文学で注目を集めるようになるが、19世紀の中心は詩だった。児童文学と呼べるかわからないが、絵本になるなどして今日まで親しまれている詩やお話が、各地でポツリポツリと現れた。

まずはキューバの詩人ホセ・マルティ（José Martí, 1853-1895）。4号きりだったが、1889年にニューヨークで『黄金時代』（*La Edad de Oro*）という雑誌を刊行し、子ども向けのお話を発表した⁵。コロンビアの詩人ラファエル・ポンボ（Rafael Pombo, 1833-1912）の、マザーグースの影響も感じられる韻文のお話集、ニカラグアのルベン・ダリーオ（Rubén Darío, 1867-1916）や、1945年にノーベル賞を受けたチリのガブリエラ・ミストラル（Gabriela Mistral, 1889-1957）の詩なども、暗誦により、広く子どもに親しまれてきた。

ウルグアイのオラシオ・キローガ（Horacio Quiroga, 1878-1937）が描く、動物や自然をテーマとする短編は、スペイン語圏で古典として読みつがれ、いくつかの邦訳がある⁶。

早い時代から出版文化が見られたのはアルゼンチンだ。19世紀後半に風刺画の雑誌が流通し始めたアルゼンチンでは、コミック雑誌が次々と出て、20世紀半ばには黄金時代を迎えた。国民的キャラクターとなった、キノ（Quino, 1932-）の『マファルダ』（*Mafalda*）⁷の連載が始まるのが1964年である。かわいいだけでなく、批判精神を含んだ絵の伝統は、現代のアルゼンチンにつながっていると思われる。

またメキシコについては、メソアメリカのコデックス⁸や壁画文化などの伝統が、視覚表現の根底に息づいている気がする。

⁵ 『黄金時代』（加藤恵子 訳、創英社／三省堂書店、2013.9）、『ホセ・マルティ選集1 交響する文学』（牛島信明ほか 訳、日本経済評論社、1998）など。

⁶ 『フラミンゴの長くつ下』（やまかわはな 訳、金の星社、1993）、『野生の蜜：キローガ短編集』（甕由己夫 訳、国書刊行会、2012）など。

⁷ 日本語版は『マファルダ』1・2、泉典子 訳、エレファントパブリッシング、2007、2008。

⁸ 先住民の絵文書のこと。イチジク科の木からつくった紙に神話や暦がかかされている。

20世紀後半のスペイン

内戦後、1975年まで続くフランコ時代は思想統制が敷かれていた。子どもの本は「顕著な教育的価値の認められるもの」でなければならないとされ、社会批判はもつてのほか、ナンセンスやファンタジーは無益で有害と見做された。

この時代の作家の中で最も有名なのは、ホセ・マリア・サンチェス＝シルバ(José María Sánchez-Silva, 1911-2002)である。捨て子の赤ん坊を修道士たちが育てるといふ、映画でもおなじみの『汚れなき悪戯』(*Marcelino Pan y Vino*, 1952. 邦訳：マリアノ・カルアーナ、西本明 共訳、春秋社、1956ほか)は、宗教色の濃い、当時の政治思想にマッチした物語だったが、その後、現実と空想が交錯する『さよならホセフィーナ』(*¡Adiós, Josefina!*, 1962. 邦訳：江崎桂子 訳、学習研究社、1967)などで親しまれた。1968年には国際アンデルセン賞作家賞を受賞し、1970年代に多数の邦訳が出た。

戦後を代表する女性作家アナ・マリア・マトゥーテ(Ana María Matute, 1926-2014)も、この頃みずみずしい感性が光る児童向け作品を数作書いた。1960年の作品『きんいろ目のバッタ』(*El saltamontes verde*. 邦訳：浜田滋郎 訳、偕成社、1969)は、口のきけない少年が、いじめられているバッタとともに自分の声を探しにいくという物語。少年が求める声を、長田弘は「口のきけない者にしか聴こえない言葉というのは(中略)、人びとが権力にむきあってもつもう一つの自分の言葉、沈黙によって語られる言葉」⁹と解釈している。

フランコ独裁時代、当初はカスティーリャ語、つまりスペイン語での出版しか許されなかったが、1961年にカタルーニャ語、ガリシア語、バスク語での出版が解禁になる。この時設立されたラガレラ(*La Galera*)社が、カタルーニャ語の児童文学シリーズの第1巻として刊行したのがサバスティア・スリバス(Sebastià Sorribas, 1928-2007)の『ピトゥスの動物園』(*El zoo d'en Pitus*, 1966. 邦訳：スギヤマカナヨ 絵、あすなる書房、2006)¹⁰だ。子どもの力を感じさせるワクワクする物語は、カタルーニャでは知らない者のない古典中の古典である。

⁹ 『読むことは旅をすること-私の20世紀読書紀行』平凡社、2008、p.154-156

¹⁰ 以下、訳者名のない翻訳書は、筆者訳。



『アドリア海の奇跡』

ジョアン・マヌエル・ジズベルト 作
アルフォンソ・ルアーノ 絵
宇野和美 訳，徳間書店，1995

スペインが、日本の戦後のような熱を帯びた児童書出版の時代を迎えるのは、フランコ死後、民主化された1980年代、1990年代のことだ。ファンタジーや社会批判、ユーモア、模範的ではない登場人物など、なんでも自由に表現できるようになる。児童書出版点数も、1965年694点、1970年1,842点だったのが、1980年には3,422点、1985年には3,942点と倍増する¹¹。

この時代を代表する作家として第一に名前が挙がるのは、ジョアン・マヌエル・ジズベルト (Joan Manuel Gisbert, 1949-) だ。独裁期には荒唐無稽として一蹴されたであろう、空想豊かな彼のデビュー作「夢の舞台」(*Escenarios fantásticos*, 1979. 未邦訳) は、新しい時代の幕開けを高らかに告げた。『アドリア海の奇跡』(*El talismán del Adriático*, 1988. 邦訳：徳間書店，1995) や『イスカンダルと伝説の庭園』(*El arquitecto y el emperador de Arabia*, 1988. 邦訳：徳間書店，1999) など、空想や冒険でぐいぐい読ませる長編で読者を魅了した。

リアリズムの代表はファン・ファリアス (Juan Farias, 1935-2011) で、いち早く内戦を批判的に描いた作品を発表した。ごく普通の人々の日常を描く名手だ。1982年刊行の『日ごかり村に戦争がくる』(*Años difíciles*. 邦訳：福音館書店，2013) では、ある小さな村における内戦の現実や人々の心の機微を、余韻のある詩的な文体で描いている。

バスク文学のベルナルド・アチャーガ (Bernardo Atxaga, 1951-) が、山にたてこもった反フランコ勢力の状況を牛の語りで描いた「めうしの記憶」(*Memorias de una vaca*, 1991. 未邦訳)、ある若者との出会いにより真実に目をひらいていく少女の成長を描いた、1988年刊行のアントニオ・マルティネス＝メンチェン

¹¹ Fernando Cendán Pazos, *Medio siglo de libros infantiles y juveniles en España (1935-1985)*, Ediciones Pirámide, 1986, p.80

(Antonio Martínez Menchén, 1930-) の『ティナの明日』(*El despertar de Tina*, 1988. 邦訳: あすなろ書房, 2009) など、内戦や独裁を考えさせる作品である。

自国の歴史批判も、フランコ時代はありえなかった。『約束の丘』(*El tiempo y la promesa*, 1991. 邦訳: 行路社, 2001) のコンチャ・ロペス＝ナルバエス (Concha López Narváez, 1939-) は骨太な歴史小説で注目を集めた。「太陽と月の大地」(*La tierra del Sol y la Luna*, 1984. 未邦訳) は、16世紀、イスラム教徒追放により、故郷を追われ、愛情や友情を失い、運命に翻弄される人々の誇りと葛藤を浮き彫りにする。

ユーモアも1980年代から解禁になる。象徴的作品が、1994年に初版が出たエルビラ・リンド (Elvira Lindo, 1962-) の『めがねっこマノリート』(*Manolito Gafotas*. 邦訳: 清水憲男 監修, とどろきしずか 訳, 小学館, 2005) だ。マドリードの下町に住む男の子マノリートのおしゃべりで展開する物語は、著者本人によるラジオ朗読で人気を博し、シリーズで100万部以上の売り上げを記録した。時に痛烈な社会風刺も含む戯画化した登場人物には好悪が分かれるかもしれないが、おじいちゃんとのやりとりなどにスペインの家族像が見てとれておもしろい。

実力派の女性作家カルメン・マルティン＝ガイテ (Carmen Martín Gaité, 1925-2000) が、自分らしく生きることを応援する児童文学作品を残したのも興味深い。ニューヨークが舞台の現代のおとぎ話『マンハッタンの赤ずきんちゃん』(*Caperucita en Manhattan*, 1990. 邦訳: 鈴木千春 訳, マガジンハウス, 2003) は、民政移行後の自由さ、闊達さに満ち、1990年以来ロングセラーとなっている。

『雨あがりのメデジン』(*Barro de Medellín*, 2008. 邦訳: 鈴木出版, 2011) のアルフレッド・ゴメス＝セルダ (Alfredo Gómez Cerdá, 1951-)、『ピクトルの新聞記者大作戦』(*Noticias frescas*, 1994. 邦訳: 国土社, 1998) のジョルディ・シエラ・イ・ファブラ (Jordi Sierra i Fabra, 1947-) は1980年代から、『ベラスケスの十字の謎』(*El Misterio Velázquez*, 1998. 邦訳: 徳間書店, 2006) と『フォスターさんの郵便配達』(*OK, señor Foster*, 2008. 邦訳: 偕成社, 2010) のエリアセル・カンシーノ (Eliacer Cansino, 1954-)、『おじいちゃんとケーキをつくろう』(*Camila y el abuelo pastelero*, 2003. 邦訳: 日本標準, 2010) のマリサ・ロペ

ス＝ソリア（**Marisa López Soria, 1956-**）は、1990年代から活躍している。

また、1990年前後から、エレナ・フォルトゥンやアントニオロブレス、マリア・テレサ・レオン（**María Teresa León, 1903-1988**）などの内戦前の作品の復刻版もようやく出てきた。

ここで絵本について触れたいが、2000年ぐらいまでのスペインでは、製作コストのかさむ絵本は非常に少なかった。絵本づくりのノウハウもなかったのだろう、体裁は絵本でも、挿絵入りの大型本にすぎないものが多かった。当時書店に並んでいた本の主流はペーパーバックの読み物だった。

そんな中で、パイオニアと呼ぶべき絵本作家がアスン・バルソラ（**Asun Balzola, 1942-2006**）だ。独裁時代から挿絵を手がけていたが、1980年代に登場した『かちんこちんのムニア』（*Munia y la señora Piltronera, 1984*. 邦訳：徳間書店, 1996）を含むムニアのシリーズは、いい子の枠におさまらない主人公の設定と淡い美しい水彩で読者を魅了し、後に続く画家たちに大きな影響を与えた。『ジョンのお月さま』（*La Lluna d'en Joan, 1982*. 邦訳：熊井明子 訳, 集英社, 1983）の著者、カタルーニャのカルマ・ソレ・バンドレイ（**Carme Solé Vendrell, 1944-**）も、この頃から現在まで活躍している。

この時代、独裁を逃れて中南米からやってきた亡命画家がいたことも触れておきたい。チリのフェルナンド・クラーン（**Fernando Krahn, 1935-2010**）は、1960年代からアメリカの出版社で仕事をしてきた絵本画家・風刺作家で、1973年以降スペインで絵本づくりを続けた。グスティ（**Gusti, 1963-**）も1980年代から現在まで活躍するアルゼンチン出身、スペイン在住の絵本作家である。多様なスタイルを持ち、『ハエくん』（*La mosca, 2005*. 邦訳：木坂涼 訳, フレーベル館, 2007）は、独特のユーモアが光るコラージュの作品である。

20世紀後半の中南米

1980年代は、中南米における児童書出版の始まりの時代だ。現在活躍するメキシコやアルゼンチンの多くの児童書出版社が、1980～1990年代に創業した。

それ以前にも、1946年にチリでラパ・ヌイ（**Rapa Nui**）という児童書出版社が

創業したのがわかっているが、1980年代以前の各国の詳しい出版事情は不明なことが多い。ラパ・ヌイは、今やどちらも国民的作品となっているチリのマルセラ・パス (Marcela Paz, 1902-1985) の『いたずらパペルーチョ』(*Papelucho*, 1947. 邦訳: 南本史 訳, 講談社, 1972)、コスタリカのホアキン・グティエレス (Joaquín Gutiérrez, 1918-2000) の「ココリ」(*Cocorí*. 未邦訳) を1947年に刊行している。

1978年に創業したベネズエラのエカレ (Ekaré) 社のラインナップは、その後の中南米の児童書出版社の路線を先取りした。欧米の優れた絵本の翻訳出版だけでなく、ラテンアメリカの自分たちの文化や歴史を表現するシリーズを始めたのだ。ベネズエラのカラカスの貧しい地区が舞台の『道はみんなのもの』(*La calle es libre*, 1981. 邦訳: クルーサ 文, モニカ・ドペルト 絵, 岡野富茂子, 岡野恭介 訳, さ・え・ら書房, 2013) は、このシリーズのロングセラーで、チリの1973年の軍事クーデター下の子どもを描いた『ペドロの作文』(*La composición*, 1998. 邦訳: アントニオ・スカルメタ 文, アルフォンソ・ルアーノ 絵, アリス館, 2004)、外国で働く父親を思う女の子の気持ちによりそう『パパのところへ』(*¡Vamos a ver a papá!*, 2010. 邦訳: ローレンス・シメル 文, アルバ・マリーナ・リベラ 絵, 岩波書店, 2014) も、このシリーズの作品である。中南米のわらべ歌や昔話の絵本も多数出版している。

2000年以降の現象

1980年代に新しい児童書出版の時代を迎えたスペインと中南米だが、ここ15年ほどで、さらにいくつかの新たな動きが見られるようになった。

一つ目は、エンターテインメント系の小説の激増である。ハリリー・ポッターが世界的にヒットした頃からか、見覚えのあるファンタジーの表紙が児童書売り場で目につくようになった。通信手段の発達のおかげだろう、英語圏のベストセラーが非常にスピーディーに翻訳されるようになった。

さらに、スペインでは、1980年代以降の出版物で育った若い世代から、ファンタジーやエンターテインメント系の作品の書き手が続々と登場している。『漂泊の王の伝説』(*La leyenda del Rey Errante*, 2001. 邦訳: 松下直弘 訳, 偕成社, 2008)、

『この世のおわり』(*Finis Mundi*, 1998. 邦訳: 同, 2010) の作者で、実力と人気ナンバーワンのラウラ・ガジェゴ・ガルシア (Laura Gallego Garcia, 1977-) は、影響を受けた本として、古典的なハイファンタジーはもちろん、ダイアナ・ウィン・ジョーンズ、コーネリア・フンケなどの作品、スタジオジブリのアニメーション作品も挙げている。『イフ: 王国の秘密』(*El Secreto de If*, 2008. 邦訳: ばんどうとしえ 訳, 未知谷, 2011) のアナ・アロンソ (Ana Alonso, 1970-) とハビエル・ペレグリン (Javier Pelegrín, 1967-) など、若い作家は続々と後に続いている。

二つ目は、絵本ブームである。絵本の画像処理のデジタル化によるコストの減少のおかげだろうか、2000年前後から、編集者が数名しかいない、ごく小さな出版社が個性的な絵本を出版するケースが増えてきた。最大公約数を狙うのではなく、独自の絵本観や美感を重んじたていねいな作りの絵本が次々と送り出され、スペイン語圏の絵本は、ここ10年でずいぶん変化した。

注目のスペインのイラストレータを紹介すると、まずは『天のおくりもの』(*Un regalo del cielo*, 2007. 邦訳: グスターボ・マルティン＝ガルソ 文, 光村教育図書, 2009)、『アリアドネの糸』(*El hilo de Ariadna*, 2009. 邦訳: ハビエル・ソブリーノ 文, 光村教育図書, 2011) のエレナ・オドリオゾーラ (Elena Odriozola, 1967-)。のびやかな線と余白のある画面構成で独特の世界を持つ。『名前をうばわれたなかまたち』(*Nombres robados*, 2010. 邦訳: 横湯菌子 訳, さ・え・ら書房, 2011) のタシエス (Tàssies, 1963-) は、2009年にブラティスラヴァ世界絵本原画展でグランプリに輝いた実力派だ。『ボンバストゥス博士の世にも不思議な植物図鑑』(*Bombástica Naturalis*, 2010. 邦訳: 西村書店, 2014) のイバン・バレネチェア (Iban Barrenetxea, 1973-)、アイタナ・カラスコ (Aitana Carrasco, 1978-)、ピオレタ・ロピス (Violeta Lópiz, 1980-)、マリオナ・カバサ (Mariona Cabassa, 1977-) など、若手の活躍も目立つ。

三つ目は、製作や研究の分野で、スペインと中南米の連携が深まっていることである。これも通信手段の発達によるところが大きいですが、スペイン語という共通言語を持つ利点を生かして、特に絵本の分野で、スペインの作家が中南米の出版社で、コロンビアの作家がメキシコで、メキシコやアルゼンチンの作家がスペインでと、

国境を越えた本作りが盛んになっている。作家たちは、外国のブックフェアのワークショップに招かれて、読者と交流の機会を持つことも多い。

ただし、説明を加えるなら、言葉は同じでも、スペイン語圏全域で流通する本は限られている。スペインで出版された本が、その社の支社のある国で流通するとか、メキシコやアルゼンチンの本がスペインでも流通するといったこともあるが、それは一部だ。ある国でしか手に入らない本もたくさんある。

研究分野では、2000年代にバルセロナ自治大学がベネズエラのバンコ・デル・リブロ (**Banco del Libro**) などの協力を得て児童書・児童文学マスターコースを開講したのが大きい。通信講座とスクーリングからなるコースには、スペイン語圏全域から学生が集まる。

また SM 財団¹²は、スペイン・ポルトガル語圏で功績のあった文学者を表彰するイベロアメリカナ児童文学賞を2005年に創設した。2010年にはチリのサンティアゴで、第1回イベロアメリカ児童文学大会という、スペインと、ブラジルを含む中南米全域の児童文学の専門家が一同に会する会議を開催した。2013年にボゴタで第2回大会が開かれた際には、スペイン語圏のイラストレータのデータベースを作るなど、スペインと中南米全体の連携はあらゆる面で強まってきている。

ちなみに、2013年のスペインの年間の新刊書籍点数を見ると、全体数が89,130点、うち児童書は10,675点である¹³。

まとめとして—スペイン語圏の独自性を前にして

では、ひと言で言うなら、スペイン語圏の児童書の特徴は何なのか？ 答えにくい質問だが、日本の児童書と比較して敢えて言うなら、英米の児童書の洗礼を受けずに、独自に表現を追求してきたことだろうか。

2013年にリンドグレン記念文学賞を受賞した、『かぞくのヒミツ』（*Secreto de*

¹² スペインの出版社 **Ediciones SM** が1998年に興した財団。教育研究、教師の養成、読書推進などを目的とし、現在スペインとメキシコに拠点があり、同社の支社がある全9か国で活動を展開している。

¹³ **Ministerio de educación, cultura y deporte**, *op.cit.*, p.53



『かぞくのヒミツ』
 イソール 作，宇野和美 訳
 エイアールディー，2014

familia, 2003. 邦訳：エイアールディー，2014)、
 『うるわしのグリセルダひめ』(*La bella Griselda*,
 2010. 邦訳：同) のイソール (Isol, 1972-) や、
 『パパとわたし』(*Papai e Eu, às Vezes*, 2011.
 邦訳：光村教育図書，2012) のマリア・ウェレニ
 ケ (María Wernicke, 1958-) に話を聞いたこ
 とがある。どちらもアルゼンチンの作家だが、幼
 い頃に英米の絵本には接していない。プロとして
 実際に作品を手がけだしてから、絵本というメ
 ディアに深く分けいり、表現の可能性を見出して、
 楽しんでいる様子が伺える。

また、スペイン語圏の作品には、日本人の目からすると「子どもらしくない」表
 現がしばしば出てくる。なぜだろうと考えるに、「子ども観」や児童文学の歴史の
 違いもあるのだろうが、彼ら作家たちが「お子さま向け」の豊富な消費材と無縁な
 社会、日本ほど至れり尽くせりではない社会で生きてきたことも大きい気がする。

メキシコの、デザイン性とアイデア満点のアレハンドロ・マガジャネス (Alejandro
 Magallanes, 1971-)、スーパーリアリズム風のファン・ヘドビウス (Juan Gedovius,
 1974-)、緻密で繊細で美しいガブリエル・パチェコ (Gabriel Pacheco, 1973-)、
 コスタリカの、『まぼろしのおはなし』(*El cuento fantasma*, 2013. 邦訳：ハイメ・
 ガンボア 文，星野由美 訳，ワールドライブラリー，2014) のウェン・シュウ
 (Wen Hsu, 1976-)、コロンビアの『やだよ』(*No*, 2010. 邦訳：西村書店，2013)
 のクラウディア・ルエダ (Claudia Rueda, 1965-)、2014年にイベロアメリカナ
 児童文学賞を受けたイバル・ダ・コル (Ivar Da Coll, 1962-)、『エロイーサと
 虫たち』(*Eloísa y los bichos*, 2011. 邦訳：ハイロ・ブイトラゴ 文，さ・え・ら
 書房，2011) のラファエル・ジョクテング (Rafael Yockteng, 1976-)、アルゼン
 チンの人気カートゥーン作家でもあるリニエルス (Liniers, 1973-)、第13回野間
 国際絵本原画コンクールでグランプリに輝いたクラウディア・レニヤッツィ
 (Claudia Legnazzi, 1956-) など、中南米の絵本作家たちの枠にとらわれない、

思い思いの表現を見ていくと興味深い。

ただ、翻訳出版というものは、作品の質と市場原理の兼ね合いで実現されていくものなので、スペイン語圏で評価の高い本が、必ずしも日本でも紹介されるとは限らない。もちろんこれはメジャーな外国語でも同様にあることだが、そもそも日本の読者の評価基準が、歴史の古い英語圏の作品から形作られたものであり、そこをのみだしたものは、珍しがられても許容されにくい現実もあるように思う。

たとえば、2012年に国際アンデルセン賞作家賞の荣誉に輝いたマリア・テレサ・アンドルエット (**María Teresa Andruetto, 1954-**) は、アルゼンチンの人々の生きざまに深く根ざした物語を書く作家である。20世紀初頭に移民としてイタリアからやってきた少年や、地方で食いつめ、都会の片隅で段ボールを集めて暮らす子どもたちの物語を読むと、貧困層が多い社会、すなわち「生きのびること」の意味することが、日本のそれとは異なる社会で生まれた物語と、日本の子どもが楽しむ物語との隔たりを感じる。

中南米の児童文学の邦訳は、近年ではアルゼンチンのリリアナ・ボドック (**Liliana Bodoc, 1958-**) の『最果てのサーガ』 (*La saga de los confines*, 2000. 邦訳：中川紀子 訳, PHP 研究所, 2011)、オスバルド・ソリアーノ (**Oswaldo Soriano, 1944-1997**) の『ぼくのミラクルねこネグロ』 (*El Negro de París*, 1976. 邦訳：アリス館, 2003) くらいしかない。法務省の2014年末の在留外国人統計によると、スペイン語圏の在留外国人は約6万5千人もいることを考えると、これはとても残念なことだ。

翻訳が他者を知る「窓」であるなら、口当たりの良いものだけでなく、ざらざらとした異質なものにももっと開かれてよいのではないか。読者の想像力や世界を押し広げることにもつながる絵本や物語が、スペイン語圏にはまだまだありそうだ。数は少ないが、関心を持って読んでいってもらえたなら何よりうれしい。

(うの かずみ スペイン語翻訳者)

ペルーの児童書事情

星野 由美

はじめに

ペルーは南アメリカの西部に位置し、面積約129万平方キロメートル(日本の約3.4倍)に、約3,115万人が暮らしている国である。地形は海岸地域(国土の約10%)、山岳地域(国土の約30%)、熱帯雨林地域(国土の約60%)の3地域に分かれ、自然が豊かで多様な気候風土を持つ。民族の割合は先住民が45%、混血37%、欧州系15%、その他3%である¹。公用語はスペイン語、ケチュア語、アイマラ語で、住民の多くはスペイン語を話している。

ペルーはラテンアメリカ諸国の中で最初に日本と国交を結んだ国である。1873年、日本の明治維新政府はペルーと日秘和親貿易航海条約を仮締結し、その後1899年に790名の日本人が、南米への初の集団移民としてペルーへ渡った。現在、ペルーに暮らす日系人は8万人以上と言われている。一方、法務省「在留外国人統計(2014年6月末)」によると、我が国に在留するペルー人の数は48,263人となっている。

多文化共生と言われる昨今、我が国の在日外国人児童を対象にした読書支援、読書環境の充実は今後益々求められるだろう。今回こうした背景を踏まえ、ペルーの児童書事情を紹介する機会をいただいた。

ペルーの児童書の魅力

スペインの児童文学研究者カルメン・ブラーボ・ビリヤサンテ(Carmen Bravo-Villasante, 1918-1994)は、児童書友好スペイン協会の会報誌に寄稿した‘La literatura infantil iberoamericana’(イベロアメリカ児童文学)の中で、ペルーの児童文学の魅力について次のように記述している²。

ペルーにとって、フォルクローレ<民間伝承>はそれだけとは言わないが、児童文学の源であり泉である。植民地時代の伝統の中で感化されたペルー文学が

¹ 外務省「ペルー共和国」<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/peru/data.html#section1>

² 以下、引用文献の訳及び<>内補注は全て筆者による。

地方の風俗描写を描く豊かさに非常に優れているとするならば（リカルド・パルマ³の『ペルー伝説集』を思い出してほしい。）、その所以は、研究者や民族学者たちがインディヘナ〈先住民〉の伝統背景をいくばくかひっかきまわす時に、インディヘナの豊かさが増すのだと想像すべきであろう。それはまるで黄金を採掘するようなものかもしれない。発掘調査の度に金属鉱山を発見するようなものだ。ペルーの素晴らしい黄金は、博物館でガラスケースに展示され私たちに驚きを与えるが、こうしたインカ時代の驚くべき財宝の驚異的な魔法は、伝説や物語の豊かな資源の宝庫に相当する⁴。

ペルーには数々の神話が尽きることなく存在すると言われている。日本人の常識では計り知れない大自然の雄大さは、アンデス山脈に見られる山岳地域、ジャングルの魅力あふれる熱帯雨林地域、そして海岸地域という多様な気候と地理的条件により生み出されたものだ。そして何より自然との共生を学ぶ姿勢こそが、子どもの教育的感性や世界観を広げる重要なテーマとなってきた。こうした自然の雄大さを背景に、ペルーの児童文学にはフォルクローレの物語が多く存在する。そして、物語に動物の存在は欠かせない。コンドル、アルパカ、ビクーニャ、ジャガー、クイ（天竺ネズミ）、ヘビ、キツネなどが、フォルクローレの物語によく登場している。

ペルーの児童書を発行している出版社

児童書を出版している主な出版社は、スペイン系グループの SM 社やプラネタ社（Planeta）、スペインのアルファグアラ社（Alfaguara）系列のサンティジャーナ社（Santillana）、コロンビアを本社にラテンマーケットで活躍のグループ企業

³ リカルド・パルマ：Ricardo Palma（1833-1919）：ペルーのロマン派の作家。1872年から1910年にかけて断続的に発表した《ペルー伝説集》は、全10巻から成る大作であり、征服以前から植民期を経て共和政にいたるペルーの風俗、伝説、歴史的逸話などをロマン主義的な手法で綴って、ひとつのジャンルを創造した。彼はこの作品でペルーの伝説と伝統を提示することにより、ペルー人としての国家意識と国民性の自覚を促している。（神代 修、世界大百科事典、平凡社、2011年改訂新版第5刷発行より引用。）

⁴ Carmen Bravo-Villasante, La literatura infantil iberoamericana, *Boletín (Asociación Española de Amigos del Libro Infantil y Juvenil)* Año X, núm. 19, enero-abril 1992 http://www.cervantesvirtual.com/obra-visor/boletin-asociacion-espanola-de-amigos-del-libro-infantil-y-juvenil-9/html/025d4036-82b2-11df-acc7-002185ce6064_16.html#I_10/

ノルマ社 (Norma)、ペルー老舗出版社のペイサ社 (PEISA)、民話や伝説に力を入れているサン・マルコス社 (San Marcos)、教育教材等を扱うブルーニョ社 (Bruño)、新鋭の出版社のボラドール社 (Borrador)、グラフ・エデシオネス社 (Graph Ediciones)、メサ・レドンダ社 (Mesa Redonda)、2010年に設立された新鋭出版社のポリフォニア社 (Polifonía Editora) 等である。2011-2012年での児童書の出版点数の多い出版社は、1位 サン・マルコス社、2位 サンティジャーナ社、3位 プラネタ社、4位 SM 社、5位 ノルマ社であった⁵。

ペルーの児童文学における代表的作家及び画家

ペルーの作家兼文芸評論家ダニーロ・サンチェス・リオン (Danilo Sánchez Lihón, 1943-) は、児童文学誌 *Crayolas y Papel* (クレヨンと紙) の中で、ペルーの児童文学の礎を築いた作家について次のように述べている。

ペルーの児童文学の頂点とも言える人物を選ぶなら、誰もが認める作家にカルロタ・カルバージョ・ヌニェス (Carlota Carvallo de Nuñez, 1909-1980) とフランシスコ・イスキエルド・リオス (Francisco Izquierdo Ríos, 1910-1981) の二人が挙がるだろう。二人は友人同士でもあり、共に20世紀以降の児童文学界の発展に広く活躍した⁶。

このように、ペルー児童文学の創始者ともいえる2名を筆頭に、その後21世紀に入り次々と児童文学作家等が活躍するようになった。例えばほんの一例であるが、2000年、第27回 IBBY⁷世界大会⁸の開催時に、コロンビアの読書推進協会であるフンダレクトゥーラ (FUNDALECTURA) は、児童文学における IBBY ラテンアメリカ加盟国の発展状況を報告するために、ラテンアメリカの児童文学作家・画家カタログ *Se hace camino...* (道をつくる…) を出版した。このカタログで、ペルーの代表的な作家および画家として次の人物たちの名前が紹介されている。作家とし

⁵ Alberto Thieroldt, 13. Con pocos espacios para su discusión como corpus, *Anuario iberoamericano sobre el libro infantil y juvenil 2013*, p.209

⁶ Danilo Sánchez Lihón, Urpicha Carlota Carvallo, *Crayolas y Papel*, junio, 2009 <http://www.crayolasypapel.com/2013/02/04/urpicha-carlota-carvallo/>

⁷ 国際児童図書評議会 (International Board on Books for Young People)

⁸ コロンビアのカルタヘナ・ディ・インディアスで開催。

ては、ロサ・セルナ (Rosa Cerna, 1926-2012)、オスカル・コルチャード (Óscar Colchado, 1947-)、ホルヘ・ディアス・エレーラ (Jorge Díaz Herrera, 1941-)、ホルヘ・エスラバ (Jorge Eslava, 1953-)、エリベルト・テホ (Heriberto Tejo, 1951-)、画家としては、ファン・アセバド (Juan Acevedo, 1949-)、コンスエロ・アマト・イ・レオン (Consuelo Amat y León, 1951-)、オスカル・パブロ・カスキーノ (Oscar Pablo Casquino, 1958-)、グレドゥナ・ランドルト (Gredna Landolt, 1951-) が紹介されている。

さらに、ペルーの民話や伝説の収集と研究に当たっている歴史研究家で作家でもあるマリア・ロストロスキー (María Rostworowski, 1915-) の存在も欠かせない。彼女はペルーの伝説や神話を集めた作品を、子ども向けに多く執筆している。

ペルーの児童文学の成長

2003年以降、ペルーの児童文学は急成長を遂げたと言ってよいだろう。2003年は年間児童書出版数が35点だったのに対し、2004年には65点が出版された。その間、傑出した作家として挙げられるのは、ロサ・マリア・ベドヤ (Rosa María Bedoya, 1962-) とホルヘ・エスラバである。その後、2005年には年間児童書出版数は73点にまで達した。その間の主な作品として挙げられるのは、オスカル・コルチャード作のチョリート少年が登場する冒険物語や、ホルヘ・エスラバ作の海賊キャプテン・センテージャが登場する物語シリーズである。その後、児童出版数は順調に増え続け、2007年には120点に及んだ⁹。

ペルーにおいて、このように児童文学が数字上急成長を遂げた一因としては、教育省による読書推進計画である「プラン・レクター」(Plan Lector) が挙げられる。イベロアメリカ市場の中で読書推進の経験豊富な国としては、アルゼンチン、メキシコ、コロンビア、スペインが挙げられる。これらの国は読書推進機関が充実し、国レベルだけでなく非営利団体などの民間団体の参加も積極的だ。一方、ペルーは上記の国々に比べると、出版市場の規模も小さく、読書推進もかなり遅れていた。

⁹ Carmen Rosa León y Carlos Maza, 11. Un universo aún en ciernes, *Actividad editorial en Perú, Anuario sobre el libro infantil y juvenil 2009*, p.166

こうした状況の中、2006年にペルー教育省の下でプラン・レクトールが提唱され、小学校の教員と児童を対象に、学年ごとに1年に12冊の本を選定し、1カ月に1冊の本を読み、読書への関心の向上を図るプロジェクトが開始された。このプロジェクトは2021年までの長期目標を設定しており、大人の読書数を増加させる、児童の読書への関心度を高める、図書館の充実を図る等について、それぞれ具体的な目標値を設定している。また、サンティジャーナ社をはじめ、ブルーニョ社、サン・マルコス社、ノルマ社等の児童書出版社が、児童書の出版の充実を図るため各社プラン・レクトールのカタログを作り、物語の発掘やフィクションを中心としたジャンルの充実に力を入れている。さらに、イベントも盛んに実施されるようになった。例えば、リマの書店で作家自らが本のプロモーションを行う等、出版社を介した読者と作家の交流も盛んになっている。こうした努力の甲斐もあって児童書出版ブームが起これ、2011年には児童書販売数は前年比15パーセントの成長を遂げた¹⁰。

しかしながら、著名な教育者であり、児童文学作家でもあるホルヘ・エスラバは、国の読書推進計画であるプラン・レクトールは適正に機能していないと警鐘を鳴らしている。エスラバによると、本を提案する教師たち自らが選定された本の評価をせず、その議論が行われていないという。つまり、教師等大人たちに読書習慣がないのだから、このプロジェクトの達成は難しいと言わざるを得ないと述べている¹¹。このように、ペルーは国を挙げて読書推進に力を入れようと本腰を上げたところではあるが、プラン・レクトールを数字上だけで判断してはならず、まだ課題は多く残されている。

近年のペルーにおける絵本出版の成長

1998年、ペルーの現代作家アルフレド・ブライス・エチェニケ (Alfredo Bryce Echenique, 1939-) が子ども向けの絵本 *Goig* (ゴイグ) をペイサ社から出版し、1999年に IBBY ベネズエラにより優良図書に選定された。この絵本の挿絵を担当

¹⁰ Venta de literatura infantil crece 15% en Perú, informa Cámara Peruana del Libro, *Agencia ANDINA*, el 8 de octubre de 2011

¹¹ Jaime Cabrera Junco, *Es demagógico decir que leer es un Placer, Lee por Gusto*
<http://leeporgusto.com/jorge-eslava-es-demagogico-decir-que-leer-es-un-placer/>

したのは、ペルー日系人で現代芸術家のエドゥアルド・トケシ (Eduardo Tokeshi, 1960-) であった。この頃から、パイサ社の絵本シリーズ ‘Serie de Quirquincho’ (アルマジロ・シリーズ) は、刊行数を伸ばしはじめた。

その後2006年には、ペルーの現代詩人として高い評価のあったホセ・ワタナベ (José Watanabe, 1946-2007) が、子どもの絵本の執筆を手掛けるようになった。ホセ・ワタナベは詩人としての活躍の他、映画や芝居のための戯曲の執筆者や、子ども向けのテレビ番組のプロデューサーとしても活躍していた。残念ながら2007年に癌で逝去したが、彼は亡くなる前に絵本の執筆に力を注ぎ、子どもが読んで楽しめる本作りを目指して8冊の絵本をパイサ社から出版した。特に、彼の遺作となった絵本『とびきりおかしいぬ』 (*Un perro muy raro*)¹²は、2012年第33回 IBBY 世界大会¹³で紹介された IBBY ラテンアメリカ・カリブ諸国による児童書セレクションの報告書に掲載されている¹⁴。



『とびきりおかしいぬ』
Un perro muy raro
ワールドライブラリー提供

ホセ・ワタナベの死後もその意志は受け継がれ、その後も3冊の絵本が出版されている。2009年には、ホセ・ワタナベの妻で詩人のミカエラ・チリフ (Micaela Chirif, 1973-) が、ホセ・ワタナベとの共著の絵本 *Don Antonio y el albatros* (アントニオさんとアホウドリ) を出版した。その後、彼女は絵本作家として活躍するようになり、現在までに6冊の絵本を出版している。また、ホセ・ワタナベの娘であるイッサ・ワタナベ (Issa Watanabe, 1980-)

¹² ホセ・ワタナベ 作, ビクトル・アギラール 絵, 星野由美 訳, ワールドライブラリー, 2015
¹³ ロンドンで開催。

¹⁴ 2011年10月、キューバのハバナで開催された国際読書会議 (Congreso Internacional Lectura 2011) 開催中、アルゼンチン、ボリビア、ブラジル、コロンビア、キューバ、チリ、エクアドル、グアテマラ、メキシコ、ペルー、ウルグアイ、ベネズエラの IBBY ラテンアメリカ・カリブ諸国12カ国は、第2回ラテンアメリカ・カリブ会議を開催し、各国の友好を深めると同時にそれぞれの地域および世界へ向けて良質な本を紹介するためのネットワーク構築等に関する提案が行われた。その一環として、IBBY ラテンアメリカ・カリブ各国の児童書を紹介する報告書が作成され、2012年、第33回 IBBY 世界大会の開催時に紹介された。

も、父親の死後出版された絵本 *El pájaro pintado* (えにかいたとり) のイラストを担当し、その後も絵本画家として活躍している。こうした流れの中、2013年には、ミカエラ・チリフ作、イッサ・ワタナベの絵による絵本『いいこにして、マストドン!』(*¡Más te vale, mastodonte!*)¹⁵が、メキシコの FCE 社(El Fondo de Cultura Económica) 主催の絵本コンクール「風の岸辺賞」(A la Orilla del Viento) を受賞した。ラテンアメリカはもちろんのこと、国際的に権威あるこの賞の受賞は、ペルー国内でも大きな話題を呼んだ。

ペルーの絵本の傾向としては、ほんの数年前まで物語が中心の作品が多く、イラストはその補足的な意味合いのものでしかなかった。動きのある柔らかい線の絵が文字と同じように語り、読者もまた絵を読む力を求められるような絵本はあまり目にしてこなかった。しかしここ数年、良質な絵本が数多く出版されるようになってきている。



『いいこにして、マストドン!』
¡Más te vale, mastodonte!
ワールドライブラリー提供

ペルーの絵本出版においては、スペイン系の大手出版社である SM 社やアルファグアラ社が児童書および絵本の部門では大きな市場を占めているが、ペルー資本であり老舗出版社でもあるベイサ社のアルマジロ・シリーズは児童書部門で高い評価を得ている。また、ポリフォニア社もペルー資本の絵本専門出版社で、フランクフルトやボローニャのブックフェアに参加するなど、国外も視野に入れた活動を展開している。2011年、同社は新たな試みとして、リマ美術館の絵本コレクションの出版を請け負っている。このプロジェクトは、教育文化振興を目的としたコンチネンタル銀行財団の後援の下、リマ美術館の展示作品をテーマにした絵本コレクション 8冊を出版するというものである(2014年現在で4冊が出版されている)。プロジェ

¹⁵ 星野由美 訳，ワールドライブラリー，2015

クトの第1作目の作品は、前述の作家ミカエラ・チリフと画家ルイス・カステジャーノス (Luis Castellanos, 1973-) による *El Contorsionista* (かるわざし) であった。この作品は、プレ・コロンビア期のクピスニケ (Cupisnique) 文化の美しい土器である「軽業師」(El Contorsionista) にインスピレーションを得て創作されたという。今後、ペルーの絵本は、フォルクローレはもちろんだが、それ以上に既存の壁を打ち破るイマジネーション溢れる作品が多く出版されるのではないかと期待される。

主な児童文学団体

主な児童文学団体は二つある。一つ目は、1980年に設立されたペルーの読書推進機関である児童文学情報資料センター (CEDILI: Centro de Documentación e Información de Literatura Infantil) である。この機関は、ベネズエラの読書推進機関バンコ・デ・リブロ (Banco de Libro) と米州諸国機構 (Organization of American States) の主導の下に設立された。現在、CEDILIはIBBYペルー代表の機関でもある。創立者であるリリー・カバジェーロ・デ・クエト (Lilly Caballero de Cueto, 1926-) は、30年にわたりペルーの読書推進プロモーターとして活動を続けている。この機関の活動維持費は個人や組織からの寄付で成り立っており、主な活動は、図書館のない地域や地方に図書室等読書の施設を設置したり、民話や神話を中心としたペルーに伝わる物語を CEDILI から出版し、読書推進に活用したりしている。クエトの功績は国際的にも認められ、2014年と2015年のリンドグリーン記念文学賞に、その名がノミネートされた¹⁶。

二つ目は、CEDILI の創設後の1982年に設立されたペルー児童文学協会 (APLIJ: Asociación Peruana de Literatura Infantil y Juvenil) である。この協会には、著名な作家や児童文学研究者等がメンバーとして名を連ねている。

ペルーの児童文学賞

主な国内の児童文学賞は二つある。一つ目は SM 財団とペルー国立図書館主催

¹⁶ 2015年リンドグリーン賞候補者リスト

<http://www.alma.se/en/Nominations/Candidates/2015/>

の児童文学賞「バルコ・デ・バポール」(Barco de Vapor, 蒸気船)で、この賞は2009年以降、毎年授与されている。二つ目は北米ペルー文化機関(ICPNA: El Instituto Cultural Peruano Norteamericano)主催の児童文学賞 ICPNA 児童書作品ビエンナーレ(Bienal de Cuento Infantil ICPNA)で、2年ごとに賞が授与されている。

絵本に関しては、2009年、新人の絵本作家発掘を目的に、第1回絵本コンクール、カルロタ・カルバジョ・デ・ムニェス賞(Primer Concurso de Cuentos Ilustrados “Carlota Carvallo de Núñez”)が設けられた。このコンクールは、IBBY ペルー代表でもある CEDILI とスペイン文化センター(El Centro Cultural de España)が共同主催、出版社サンティジャーナ社が後援し、審査員たちはペルーでも有名な作家、詩人、出版界の専門家たちで構成された。このコンクールで受賞したのは、*El Sueño de Buinaima* (ブイナイマの夢)という作品である。アマゾンのジャングルの奥に暮らすウイトト族に伝わる伝説や神話を、ウイトト族出身のアーティストであるレンベル・ヤワルカーニ(Rember Yahuarcani, 1985-)が手がけた作品だ。

ペルー国内のブックフェア

ペルーは、他のラテンアメリカ諸国(アルゼンチン、メキシコ、チリ等)のように、児童書を推進するブックフェアはいまだ開催されていない。現在のところ、国内で一番大規模な国際ブックフェアは、ペルー図書会議所(Cámara Peruana del Libro)主催で毎年7月に開催される「リマ国際ブックフェア」(Feria Internacional del Libro de Lima)と毎年11月頃に開催される「リカルド・パルマ・ブックフェア」(Feria del Libro Ricardo Palma)である。リマ国際ブックフェアは、ラテンアメリカを中心としたおよそ20カ国の参加国による国内外の書籍を展示販売するフェアで、来場者は、2012年は26万5千人という数字が挙げられている。同じくリマで開催される秋のブックフェア、リカルド・パルマ・ブックフェアは同年17万人であった。これらのブックフェアにおけるペルー国内刊行児童書の売上は、フェ

¹⁷ Alberto Thieroldt, 12. Bajo una lectura predominantemente formativa, *Anuario iberoamericano sobre el libro infantil y juvenil 2012*, p.203

ア全体の売上げの35パーセントを占めるということである¹⁷。ブックフェアはリマ以外にも、トゥルヒージョ、ワンカーヨ、アレキパなどの県でも開催されている。地方で活動する作家やアーティストにとっては、こうした地方でのブックフェアが出版社、批評家、プレス、作家等との貴重な交流の機会となっているという。今後、首都リマを拠点とするペルー図書会議所等の団体がいかに地方との連携を図っていくのかが、新たな作品や作家の発掘への大きなカギとなるのかもしれない。

おわりに

以上、ペルーの児童文学の特徴が「フォルクローレ」であることを踏まえつつ、ペルーの児童書事情について紹介した。最近の動向については、SM 財団が実施している『児童文学に関するイベロアメリカ年次報告』において、2009年以降「ペルーの児童文学」の項が掲載されるようになったため、それを参考にした。また、絵本事情については、SM 財団の報告書のような参考資料が見あたらなかったため、ペルー教育省発行のカタログや新聞および児童文学専門誌等の情報を中心に最近の動向を探った。また、ペルー人の元職場関係者ならびに絵本作家の友人等に多くの良書を推薦してもらい、作品選定や傾向を探る上で参考にさせていただいた。

今後もペルーの児童書出版数は、プラン・レクトールの充実とともに益々増えていくだろう。フォルクローレの作品だけでなく、恋愛や友情をテーマにした青春物語や、美術館とのコラボレーションによるアーティスティックな絵本など、幅広いジャンルの作品が数多く見られるようになってきている。雄大な自然の恵みを豊かに描く作品も魅力だが、それだけではないペルーの新たな作品にも益々注目していきたい。

(ほしの ゆみ スペイン語翻訳者)

中東・中央アジアの児童書事情（出張報告）

山本 直樹

はじめに

国際子ども図書館（ILCL）では国内の児童書のみならず、世界130以上の国・地域の児童書を所蔵している。ドイツ語、フランス語といった主要なヨーロッパ言語や、中国語、朝鮮語といった東アジアの児童書は、必要な情報を比較的入手しやすく、選書も容易だが、その他のアジア・アフリカ地域の児童書については、出版事情が不明な場合が多く、ウェブ上の情報も限られるため、選書は難しい。アジア・アフリカ地域の選書を担当する筆者は、2015年3月に、中東及び中央アジア地域の児童書出版状況の調査のため、カタール、サウジアラビア、ウズベキスタンの3か国を訪問した。いずれの国も初めての訪問であり、事前調査を経てから挑んだが、それを上回る様々な発見があったので、ここにその一端を紹介していきたい。

カタール



建設中のカタール国立図書館

アラブ世界の中で児童書の出版が活発な国といえば、主にエジプト、レバノンが挙げられるが、中東情勢の変化や、湾岸地域の急速な経済発展に伴い、ドバイ、アブダビを擁するアラブ首長国連邦（UAE）での出版数の伸びが著しいなど、ここ数年で出版事情は変容してきている。ハードカバーの美しい絵本を続々と出版しているカリマート社（كلمت）

などが代表的な出版社である。UAEと同じく湾岸諸国に属するカタールもまた、今後出版の拡大が期待される国の一つである。

カタールはアラビア半島の東側、ペルシア湾岸に位置する小国であるが、ジョージタウン大学やロンドン大学といった欧米系大学の分校が設置されたほか、2022年にワールドカップサッカー大会の開催が決定するなど、文化・スポーツ分野に力を入れている点が特徴的であり、国内のインフラ整備も急ピッチで進められている。

カタール国立図書館 (Qatar National Library : QNL) もその一つであり、現在、新館をエデュケーションシティ (Education City) に建設中である。準備事務所を訪問すると、アラブ系の職員だけでなく、世界各国から集められたベテラン図書館員が、リニューアルオープンに備えて忙しく働いていた。今まで QNL は、他のアラブ諸国の出版社のアラビア語児童書を所蔵していたが、近年、国内でも、カタール・ブルームズベリー出版社を始めとする出版社が設立され、カタール独自の児童書が出版されるようになった。また、世界各地からの出稼ぎ労働者や移民が多いこともあり、アラビア語だけでなく、英語での出版も盛んである。英語・アラビア語併記の絵本の多くは、両開きになっており、英語は右から、アラビア語は左から読み進められるようになっている。現地のおはなし会では、話し手が二人登場し、一つの物語を、一人はアラビア語、もう一人は英語で交互に話すなど、幅広い層の利用者が楽しめるよう工夫した取組が行われており、子どもたちに好評だそうだ。

代表的なカタールの児童書としては、国際図書館連盟 (IFLA) の巡回展示会プロジェクト、絵本で知る世界の国々 (The World through Picture Books - Librarians' favorite books from their country) のブックリストに掲載されているクルスム・アル=ガーニム (كلمة الغائم) の「ハムダと



ドーハ・ジャリール書店の様子

フィサイクラ) (حمدة وفسيكرة) は「中東のシンデレラ」とも言うべき、アラブの伝承を基に創作された絵本であり、マイー・アル=マンナーイー (مي المناعي) による幻想的な絵も印象深い。人気作家アブドゥルアジズ・アール=マフムード (عبد العزيز آل محمود) の「聖なる帆」(الشراع المقدس) は、大人向けではあるが、15世紀後半の中東を舞台にした、幅広い世代が楽しめる歴史小説である。「カタールの環境発見」(اكتشف بيئة قطر) シリーズ全6冊) は、豊富な写真でカタールとその周辺の動植物を紹介する知識読み物である。また、中東の民話を集めたフランシス・ギレスピー (Frances Gillespie) の *The Blue Jackal* (青いジャッカル) は、カタールの石油メジャーの支援によって、イギリスの出版社から英語で刊行されている。そ

¹ <http://www.ifla.org/files/assets/hq/publications/professional-report/136.pdf>

のほか、市内中心部に位置するイスラム美術博物館でも児童書が出版されており、ミュージアムショップで購入できる。

サウジアラビア



キング・アブドゥルアジズ公共図書館
子ども館の展示書架
(在サウジアラビア日本大使館・安藤泰氏提供)

サウジアラビアはアラビア半島の大半の面積を占め、石油大国として名高いが、児童書の出版事情については不明な点が多い。イスラム教スンナ派の中でも特に保守的で厳格な教義を国是とし、現地のアラブ人は誰もが、男性はトーブと呼ばれる白い服、女性はアバヤやヒジャブなどの真っ黒な服、といった伝統的な衣装を身にまとっている。繁華街など

人が集まるところにはムタワと呼ばれる宗教警察がおり、風紀を取り締まっている。外国人が多いカタールとは違い、街の看板も英語併記があまりなく、アラビア語のみである。また、公休日は金曜日で、日曜日は平日である。1日5回ある礼拝の時刻になると、街中にアザーン²が響き渡り、礼拝が終わるまでの間、公共の建物や商店など、あらゆる施設のシャッターが下りる。

児童書にもまた、サウジアラビアならではの特徴が表れている。一部のジャンルでは、偶像崇拝を禁じる教えに従い、人物が登場しない絵本が出版されている。こういった絵本では、人物が登場する場面では、木の陰から会話の吹き出しだけ、あるいは体の一部だけが描かれるなど、他のイスラム文化圏でもあまり見られない独特の表現手法が用いられている。内容もまた、宗教的価値観に基づいた道徳を説くものなど、ストーリー性より教育性を重視したものが多く、価格も他のアラブ諸国に比べて安い。

図書館もまた特徴的である。サウード王家の財団によって運営されている、キング・アブドゥルアジズ公共図書館（King Abdulaziz Public Library : KAPL）は首都リヤドにある大きな図書館の一つである。建物は男性用と女性用・子ども用と

² モスクのミナレット（塔）から発せられる、礼拝を呼びかける声。

に分かれている。閲覧スペースを男女別に分けることは他のアラブ諸国やイスラム圏でも、一部の図書館で見られるが、サウジアラビアの場合は、全ての図書館が男女別であるか、もしくは女性専用の利用時間が設けられ、利用者は男女で厳密に区別される。

KAPL で子どもたちの間で人気がある絵本としては、アルワー・ハミス (لؤى خميس) の「ズィヤードとお月様」(زيد والقمر・サウジアラビア)、ラジーナ・アル＝アシル (لجينة الأصيل) の「りんごのドレス」(ثوب تفاحة・レバノン)、ナビーハム・ハイドリー (نبيهة محييلي) の「君の瞳よ開けゴマ」(افتح يا سمسم عينيك・レバノン) などがある。翻訳作品では、スウェーデンの作家グニッラ＝ベリイストロム (Gunilla Bergström) の『おやすみアルフォンス』(تصبح على خير يا برهمن・スウェーデン)、日本の五味太郎の『きんぎょがにげた』(السحكة الملونة هربت・エジプト) などが人気とのことである。

なお、KAPL では出版事業も行っており、ブッククラブと称して現地の子ども向けに



リヤド国際ブックフェア会場の様子

に会員制の定期配本サービスを行っているのみならず、サウジアラビアの著名な本を世界各国の言語に翻訳したり、逆に海外で書かれたサウジアラビア関連書をアラビア語に翻訳したりもしている。日本語に翻訳された児童書には、水の大切さを訴える、ワッダート・アル＝アンマール (وداد العمال) の『水のしずく』や、怪我をした渡り鳥を看病した3姉妹を描いた、オマイマ・アル

＝ハミス (أميمة خميس) の『小麦をくれた渡り鳥』などの絵本がある。

中東諸国では市中での書籍流通は限られており、街の書店であらゆる本が入手できるとは限らない。一度に多くの出版社の情報を入手できる、またとない機会である、リヤド国際ブックフェアへの参加もまた、今回の出張の目的の一つであった。アラブ諸国、中東諸国を中心に28の国・地域から476の出版社・機関が出展し、広大な会場は夜遅くまで多くの人でにぎわっていた。日本からは国際交流基金が出展しており、日本文化の紹介や、書道の出し物が好評だった。

サウジアラビアで児童書の刊行が盛んな出版社としては、アル＝カーセム社 (القاسم) があり、「子どものためのカーセムシリーズ」(سلسلة القاسم للصغار) や「科学と

環境のおはなしシリーズ」(سلسلة حكايت علمية وبيئية)などが廉価で販売されている。また、KAPL やキング・ファハド国立図書館 (King Fahd National Library : KFNL) など、図書館を始めとする公共機関のブースも見られ、イスラム文化省のブースでは、イスラム教関連の様々な読み物や CD-ROM が無料で配布され、現地の人々に好評であった。

クウェートのブースでは、Nova Plus 社による出版物が目立った。同社は年間40冊以上の新刊書を出版しており、サアド・アル＝バドウル (سعد البدر) の「過ぎ去りし時の夜」(ليل السوالف) や、アブドゥルワッハブ・アッ＝リファーイー (عبد الوهلب الرفاعي) の「謎の領域」(منطقة الغموض) などの長編小説は、女子学生の間で人気とのことである。また、タグリード・アル＝マシャーリー (تغريد المشاري) による長編小説「愛の終極」(العشق منتهى) はサウジアラビア国内で出版されている。オマーンのブースではイスラム教の開祖ムハンマドの生涯を描いた絵本「預言者の伝記」(السيرة النبوية・シリーズ全8冊)などを販売し、アルジェリアのブースでは、1960年のフランスからの独立戦争を描いたサーリヒー・シャリーファ (صالحى شريفه) の児童向け読み物『革命志士らの日記』(أشبال الثورة يوميات) など歴史物もたくさん並べてあった。ほかに、エジプトやレバノンの出版社からも様々な児童書が展覧されていた。

ウズベキスタン

リヤドからドバイを経由して、中央アジア最大の人口を擁する国・ウズベキスタンの首都タシケントへ向かった。ウズベキスタン・カザフスタン・トルクメニスタン・タジキスタン・キルギスの中央アジア5か国は、いずれも国民の多くがイスラム教徒であるが、同じイスラム圏でも、中東諸国とは文化も民族も異なり、シルクロードの中継地点として、さまざまな文化が入り混じって発展してきた。ウズベキスタンの公用語はテュルク系言語に属するウズベク語であるが、首都タシケントでは旧ソ連時代からの名残で、いまだにロシア語を話す人も多い。住民の多くはウズベク人で、ウズベク語とロシア語の両方を話し、最近の教育現場では英語学習にも力を入れている。

もともとテュルク系言語にはウイグル文字や突厥文字といった独自の文字があったものの、8世紀以降、イスラム教の受容に伴い、次第にアラビア文字が使われるようになった。その後、19世紀末以降のロシア植民地時代に、ジャディード運動と

呼ばれる教育改革が進められ、ラテン文字（アルファベット）を用いて表記されるようになったが、1940年以降、旧ソ連の統治が厳しくなるにつれて、ロシア語と同様のキリル文字が使用されるようになった。このように、時代によって使用される文字が異なっていることが、中央アジアのテュルク系言語の大きな特徴である³。

ソ連崩壊後の1993年以降、ウズベキスタンではラテン文字を用いた教育が行われるようになった。周辺のテュルク系言語を公用語とするトルクメニスタン（トルクメン語）やアゼルバイジャン（アゼルバイジャン語）では、ソ連崩壊後、言語表記をキリル文字からラテン文字へと一斉に切り替えたのに対し、ウズベキスタンでは全面的な切り替えには至らず、現在でも街の至る所にキリル文字で書かれた看板がある。すなわち、1993年以降に小学校に入学し、ラテン文字を教わった世代と、旧ソ連時代の小学校でキリル文字を教わった世代とは、読み書きする文字が異なるのである。

書店に行くと、児童書や若者向けの本はラテン文字で書かれているが、大人向けの本や学術書はキリル文字で書かれたものが多い。古書店街に並んでいるのはロシア語の本ばかりであるが、新刊書店にはたくさんのラテン文字の児童書が陳列されていた。映画化されたガフル・グロム（Gʻafur Gʻulom）の「いたざらっ子」(Shum Bola) や、ウズベキスタン民族文化功労者の称号を獲得した重鎮作家、フドイベルディ・トフタボイエフ(Xudoyberdi Toʻxtaboyev)の「黄色い巨人」(Sariq Devni) シリーズは、多くの人々に親しまれている。児童書は文字だけでなく体裁も変化し



ウズベキスタン・国立子ども図書館
(1907年築。1965年開館)



タシケント・シャルク書店の様子
(ラテン文字で書かれた児童書が並ぶ。)

³ Juliboy Eltazarov 「20世紀の中央アジアにおける表記法改革—ウズベキスタンの経験」『民族紛争の背景に関する地政学的研究』Vol. 1 (2007年) 大阪大学世界言語研究センター ほか。

しており、旧ソ連時代はホチキス留めの簡略な装丁の絵本がほとんどであったが、現在はハードカバーの絵本や長編読み物のペーパーバックなど、見た目にもバラエティに富んでいる。

おわりに

前述のとおり、西アジア・中央アジアの児童書事情は大きく変容してきており、今後もさらなる充実が期待される。ILCLの《子どもの本は世界をつなぎ、未来を拓く!》という理念を体現するためには、誰もが知っている国のみならず、身近でない国、今まで接する機会が少なかった国の本を積極的に紹介することも重要である。

西アジアや中央アジアの児童書が日本国内で入手困難な理由としては、取り扱っている書店や図書館が少ないだけでなく、アラビア語等、アジア諸言語の書誌情報整備の困難さも考えられる。とはいえ、以前に比べてISBNが付与される本が増え、インターネット書店をにぎわせており、ウェブ上に公開される情報はこれから増えていくだろう。また、カタールやウズベキスタンへは、日本からの直行便も就航しており(2015年6月現在)、今後の人的交流の拡大も予想される。そのような中で、当該地域の児童文学に関する研究がいつそう発展し、新しい児童書が日本語に翻訳され、多くの人を知るようになることが期待される。2015年、国際子ども図書館に新たに開室した児童書研究資料室の所蔵資料が、そのお役に立てば幸いである。

今回の出張では訪問先の各図書館を案内して下さった皆さんのほか、多くの方々のお世話になった。特に、在サウジアラビア日本大使館の安藤強土氏及び夫人の安藤奏氏(現プリンス・スルタン大学非常勤講師、元在シリア大使館広報文化アタッシュェ)からは『はだしのゲン』アラビア語版(جن الحافي・エジプト)を寄贈いただいたほか、男性が入室できないキング・アブドゥルアジズ公共図書館分館(子ども部門)についての詳細な情報を提供いただいた。また在ウズベキスタン日本大使館の浅村卓生氏からは、言語学的見地から現地児童書について助言をいただいた。この場を借りて御礼申し上げる。

(やまもと なおき 資料情報課)

「子どもの読書活動推進支援計画 2015」を策定しました

平成22年に策定した「国立国会図書館国際子ども図書館 子どもの読書活動推進支援計画 2010」（以下「2010」という。）は、平成26年度で計画期間が終了したため、これを改訂しました。新計画では、「2010」で一定の評価をいただいた取組は継続すると共に、子どもへのサービスに携わる方々への研修の充実や情報発信の改善などを図っていきます。新計画の取組は、子どもの読書活動を推進する上で即効性のあるものばかりではありませんが、引き続き、子どもへのサービスに携わる方々の活動に連携・協力していきます。

（国際子ども図書館）

国立国会図書館国際子ども図書館 子どもの読書活動推進支援計画 2015

1. 目的

国立国会図書館国際子ども図書館（以下「国際子ども図書館」という。）は、立法府に属する国立国会図書館の組織として、また、国立の児童書専門図書館として、平成12年の開館以来、関係諸機関と連携しながら様々なサービスを行ってきました。

この間、平成13年12月に「子どもの読書活動の推進に関する法律」（平成13年法律第154号）が制定されました。同法に基づき、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」が閣議決定され、国や地方自治体においても、子どもの読書環境を整備するための施策が展開されています。

立法府に属する国際子ども図書館においても、同法の理念を踏まえ、児童書の専門図書館として全国の図書館等における子どもの読書活動推進の取組に資するとの立場から、平成22年度に「国立国会図書館国際子ども図書館 子どもの読書活動推進支援計画 2010」（以下「2010」という。）を策定しました。そして、この計画に沿って、インターネットを活用した情報発信の強化、児童サービス関係者の連携促進や子どもの読書活動推進に係る調査研究等に取り組んできました。これらの取組は、一定の成果を上げており、今後も継続して実施していきます。

一方、なお改善すべき課題もあります。平成27年度には、施設の増築・改修により、資料収蔵規模が拡大し、研修室等の施設も整備されます。これを機に、新たなサービスを展開するとともに、「2010」の後継計画として本計画を策定し、引き続き関係諸機関と連携しつつ、子どもの読書活動推進に資する取組の充実を図ります。

2. 計画期間

平成27（2015）年度から平成31（2019）年度までの5年間

3. 支援対象

全国の公共図書館、学校図書館、文庫等の児童サービス関係者

4. 取組方針

国際子ども図書館は、国立国会図書館の一組織として、国内外の児童書及び児童書研究資料や関連情報の収集・保存・整備に努めるとともに、その所蔵資料その他の情報資源を活用し、関係諸機関と連携して、次の四つの方針に沿った支援を行います。

- (1) 子どもの読書に関する情報発信
- (2) 人材育成及びネットワーク構築
- (3) 国際子ども図書館における実践
- (4) 所蔵資料等を活用した情報提供

5. 取組事項

- (1) 子どもの読書に関する情報発信
 - ① 国際子ども図書館ホームページを改訂し、児童書に関する情報や子どもの読書活動推進に資する情報をより分かりやすい形で提供します。
 - ② 国際子ども図書館メールマガジンを配信するとともに、各種媒体を活用して、積極的に情報を提供します。
- (2) 人材育成及びネットワーク構築
 - ① 児童サービス担当者を対象に、児童サービスに関する基礎的な集合型研修を新たに実施します。
 - ② 児童書に関する知識かん養に資するため、「児童文学連続講座」を開催します。また、本講座のうち基礎的な科目については、インターネットを通じた受

講も可能となるよう、遠隔研修の教材化を図ります。

- ③ 児童書や児童サービスに関する基礎的な研修には、国立国会図書館が実施する派遣研修の枠組みで、講師を派遣します。
- ④ 関係者が一堂に会して事例紹介・意見交換・相互交流できる場として、子ども読書連携フォーラム（仮称）を開催します。
- ⑤ 児童書の出版状況に関する基礎的調査、読書活動推進の現場に資する調査研究を実施します。

(3) 国際子ども図書館における実践

- ① 中高生を対象とする調べ学習体験プログラム、乳幼児向けのわらべうたと絵本の会、幼児・小学生向けのおはなし会、小学生向けの科学あそびなどを実施します。
- ② 児童サービスにおける蔵書構築の例として、調べものの部屋、子どものへや、世界を知るへやに配置している各分野の資料リストを紹介します。
- ③ 国際子ども図書館ホームページにおいて、キッズページ、子ども OPAC、中高生向け電子展示会など、子どもの図書館利用の契機となるようなコンテンツを提供します。
- ④ 学校図書館セット貸出しを継続し、資料選定手順や活用事例の紹介を行います。

(4) 所蔵資料等を活用した情報提供

- ① NDL-OPAC 等で提供する児童書の書誌に件名付与やあらすじの追加を行い、検索の利便性向上に取り組めます。
- ② 各種図書館を対象に、児童書に関するレファレンス、図書館間貸出し、遠隔複写サービスを継続して実施します。
- ③ 児童書及び児童サービスに関する情報の調べ方案内を提供し、レファレンス協同データベースで事例を紹介します。
- ④ 児童書研究資料室内に、読書活動推進支援コーナーを設置し、読書活動に関する国内外の資料や情報を提供します。
- ⑤ 本の魅力に触れ、本に親しむ契機となる場として、本のミュージアムや平成27年度に新設する児童書ギャラリーでの展示のほか、各資料室でも随時小展示を行い、展示資料リストを提供します。

講演会「わたしの物語作法―「古き」ベルリンの若者たちの今」



クラウス・コルドン（Klaus Kordon）氏は、ドイツ児童文学賞、オランダの銀の石筆賞ほか、国内外の数々の児童文学賞を受賞し、2013年にはドイツ連邦共和国勲章大功労十字章を受賞した、まさにドイツの国民的児童文学作家である。

平成26年11月、ドイツからコルドン氏を招き、国際子ども図書館、大阪府立中央図書館、大阪国際児童文学振興財団の3者が共同して、29日（土）と30日（日）に、東京と大阪で標記の講演会を行った。当館としては初めて、外部機関の御協力を得て2都市で講演会を開催したが、これにより数多くのコルドン作品ファン、児童文学関係者の方々から氏の貴重な講演を届けることができた。以下、講演会の概要について紹介する。

東京講演会（11月29日）

国際子ども図書館ホールで標記講演会が行われ、122名の参加者を得た。

まず、酒寄進一氏が対談形式で、コルドン氏の半生についてインタビューしながら作品執筆の背景を探り、導入とした。



クラウス・コルドン氏は、1943年にベルリンのプレントラウアー・ベルク地区に生まれ、東ドイツで育った。第2次世界大戦で父を亡くし母に育てられるが、その母も1956年に亡くなり、児童養護施設で育った。経済を学んで貿易商となり、取引のためインド等に行き来した経験は、後に執筆された作品に投影されている。1961年、「ベルリンの壁」が建設されてベルリンは東西に分断され、氏は1972年にブルガリア経由で西側へ亡命を図るが失敗し、ベルリンのホーエンシェーンハウゼン収容所に拘留された。約1年間の収監の後、解放されて西ベルリンに移住し、本格的に児童文学作品を執筆し始める。貧困、戦争といった重厚なテーマを扱いつつ、様々な人間の在り方を温かな眼差しで見つめる作品が多い。

代表作として、酒寄氏が翻訳し、今回の講演会で中心的に取り上げることになった

ベルリン3部作が紹介された。革命、帝政崩壊と第1次世界大戦の終了を描いた『ベルリン1919』、国家社会主義ドイツ労働者党（ナチ党）の台頭を描いた『ベルリン1933』、第2次世界大戦終了前後を描いた『ベルリン1945』の3作品¹には、貧民街に暮らす労働者一家の子どもたちの視点から見た激動のベルリンと、時代に翻弄されながらも真摯に生きる人間像が描かれている。その他、自身の投獄体験に基づいた自伝的小説『うなじにクロコダイル』（未邦訳）、そして近著についても紹介された。

対談の通訳を務めたマライ・メントライン氏は、インド社会における少年たちを描いた『モンスーンあるいは白いトラ』²を、子ども時代にどのように読んで受け止めたかなど自身の経験も交えつつ、ドイツの子どもから見たコルドン作品の意義について語った。

続いてコルドン氏の講演では、氏は著名な文学者・歴史学者らの言葉を引用しながら、何を目的とし、何に留意して作品執筆に臨んでいるかを語った。まず「才能は関心を持つことと同義である。」という劇作家のベルトルト・ブレヒトの言葉を引き、氏の半生と戦後ドイツの歴史とがほぼ重なっていたためにドイツの歴史に関心を持ち、そして何が真実なのか、なぜ戦争が起きるのかを問い続ける中で、自分の思いを言葉にし、戦争を知らない世代の子どもたちに歴史の真実を伝えざるを得なかったという、執筆の動機について語った。そして、綿密な歴史的事実の調査や戦争を生き抜いた老人たちへのインタビューなどによって細部の表現を練りながら、生き生きとした登場人物像、子どもたちがわくわくする物語を作り上げていくという執筆手法を紹介した。他にも、ゲーテ、サルマン・ラシュディ、ヘルマン・ヘッセ、アンドレ・ジイド、エーリヒ・ケストナー等の言葉を巧みに引用しながら、青少年に歴史に学ぶことの重要性を訴えるため書き続けるという、作品に込めた思いについて語った。

アンケート結果でも、氏の創作に対する思いに触れ、感銘を受けたという多くの意見があり、氏の言葉が多く聴衆にしっかりと伝わったことが実感された。

¹ いずれもクラウス・コルドン 作，酒寄進一 訳，理論社刊。

『ベルリン1919』（*Die roten Matrosen, oder, ein vergessener Winter*, 2006, 請求記号943-コル）

『ベルリン1933』（*Mit dem Rücken zur wand*, 2001, 請求記号943-コル-高）

『ベルリン1945』（*Der erste Fruhling*, 2007, 請求記号943-コル）

² 大川温子 訳，理論社，1999（*Monsun oder der weisse tiger*, 1997, 請求記号943-コル-高）

大阪講演会（11月30日）

講演会は大阪府立中央図書館大会議室で開催され、82名の参加者を得た。まず、酒寄氏からコルドン作品の紹介を兼ねた講演があり、その後、コルドン氏が講演した。聴衆からは質問が相



次ぎ、講演会終了後にはサインを求める熱心なファンの長蛇の列ができた。中には、東京から駆け付けた方や手紙を手渡したりする方もあり、どれほどコルドン作品が熱心に読まれ、浸透しているかが実感された。コルドン氏によれば、ベルリン3部作が翻訳、出版されているのはオランダと日本のみとのことだが、日本でこれほど熱烈な歓迎を受けるとは予期しておられなかったようで、驚きながらも喜ばれていた。

なお、大阪における酒寄氏とコルドン氏の講演内容は、大阪国際児童文学振興財団が記録を作成し販売している³。これには、実際の講演会では時間の都合で割愛せざるを得なかった内容も含まれているので、多くの方に御覧いただければ幸甚である。

2015年、日本は戦後70年を迎えた。その前年に、ベルリンに生きる庶民の目線から生まれる、「なぜ戦争が生まれるのか、なぜ人は戦争を止めることができないのか」という真摯な問いを描き続け、そして歴史に何を学ぶかを、子どもたちを始めとする読者に訴え掛け続ける作家本人から、作品の生まれた背景や作品に込めた思いについて、じっくりと話を伺えたことには大きな意義があった。

この事業の遂行に当たっては、酒寄氏に講演のみならず、企画からコルドン氏との調整に至るまで多大な御協力をいただき、メントライン氏にも多大な御尽力をいただいた。御両名とも非常に多忙な身の上でありながら、コルドン氏と氏の作品に対する熱い思いから、この事業のために多くの時間と労力を割いてくださった。末尾ながら、御両名に深く感謝申し上げる。

（企画協力課）

³ http://www.iiclo.or.jp/06_res-pub/05_publication/index.html

クラウス・コルドンが描く時代の万華鏡

酒寄 進一

コルドンの複眼の視点

2014年11月、国際子ども図書館の招きでドイツの児童文学作家クラウス・コルドン(Klaus Kordon)が初来日した。およそ1週間、行動を共にする機会を得たことは一生ものの体験となった。あらためてこの機会を作ってくれた国際子ども図書館のスタッフのみなさんに感謝したい。

コルドンは1943年、第2次世界大戦のさなかにベルリンで生まれた。青春期を東ベルリンで過ごし、1972年に西側への亡命に失敗し収監され、その後「自由買い」(Freikauf)と呼ばれる非公式交渉で釈放されて旧西ドイツ市民となる。作家となるのはその後のことだ。彼は冷戦期の旧東西ドイツの両方をよく知る数少ない作家だといえる。彼の持つ複眼の視点はさまざまな作品に活かされていて、来日時のメインテーマとなった「ベルリン3部作」¹でも重要な役割を担っている。

「ベルリン3部作」では、ベルリンの貧しい地区に暮らすゲープハルト家を中心に1918年から1945年までのベルリンの歴史が定点観測されていく。読者は歴史の結果を知っているのだから、どういう選択が吉で、どういう判断が凶となるかわかっている。だが登場人物たちは、そのときそのときをさまざまな思いで受け止めていかなければならない。ゲープハルト家の中だけでも、徹底した左翼の者がいれば、ナチに迎合する者もいた。



マルタ・ゲープハルトの場合

ここでは1912年にゲープハルト家に生まれた少女マルタに注目しながら、コルドン

¹ いずれもクラウス・コルドン 作，酒寄進一 訳，理論社刊。

【ベルリン1919】(*Die roten Matrosen, oder, ein vergessener Winter*, 2006, 請求記号943-コル)

【ベルリン1933】(*Mit dem Rücken zur wand*, 2001, 請求記号943-コル-高)

【ベルリン1945】(*Der erste Fruhling*, 2007, 請求記号943-コル)



『ベルリン1919』
クラウス・コルドン作
酒寄進一 訳、理論社、2006

が時代にもまれた人間の半生をどのように描いているか見てみたい。

第1作『ベルリン1919』のマルタは5歳。親と兄が留守をする日中、彼女は同じアパートに住むシュルテばあさんの世話になっている。そしていつもばあさんのスリッパ作りの内職を手伝わされていた。日頃から不平を漏らしているが、かといくと、クリスマスにサンタクロースからプレゼントをしっかりともらおうと、くつ下代わりにスリッパを盗んできたりする、そんな女の子だ。生まれたばかりの赤ん坊ハンスが熱をだし、食べ物を残せば、「ねえ、ハンスぼうやの分もらってもいい？」

(282頁)とちゃっかり横取りしようとする。第1次

世界大戦末期の困窮した暮らしの中でマルタが見せるどん欲さはむりのないことだろう。彼女の幸せはもらえるかどうかもわからないプレゼントであり、食べ物だった。

第2作『ベルリン1933』のマルタは20歳。働きに出てはいるが、いまだ貧しく、弟ハンスと部屋を共有している。マルタは兄ヘレの幼なじみギュンターと恋仲になる。その矢先、ギュンターがナチ突撃隊に入隊する。弟のハンスは共産党員の兄から影響を受けていて、ギュンターに拒否反応を示す。

そんなハンスに、マルタは訴える。その言葉をじっくり鑑賞してみたい。

あんたになにがわかるのよ。あたしが、こんなうらぶれたアパートにいつまでも暮らしたいと思う？ おばあちゃんになってまで、一階のトイレまでおりていきたいと思う？ 知ってるでしょ、電気がくるようになったのもここ二、三年のことなのよ。あたしははじめヘレといっしょのベッドで寝て、つぎがあんたで、ムルケルとだっていっしょに眠らされたんだから。夏には汗だくになり、冬には腰のひえる、このろくでもない屋根裏部屋で、五歳のときにスリッパの荷造りを手伝わされたのよ。(中略)ギュンターは出世したいのよ。あたしとおなじ。でもナチ党にはいったのは、そのためだけじゃないわ。ナチ党が正しいって確信したからよ。いってたわ。社会民主党は口先ばかりだし、共産

党は世界革命だとか、全人類の幸福だとかできっこないご託をならべているばかり。望んでいるのはそういう大きな幸福じゃなくて、個人のささやかな幸福なんだ、ってね。(94-95頁)

「個人のささやかな幸福」を追及すること、それが小さい頃からのマルタの基本姿勢だった。そのこと自体を非難することはできない。そういうある意味、目先の幸せを求めてナチに迎合した人はマルタだけでなく、当時のドイツには大勢いたはずだ。では母マリーと父ルディは、そういう娘の言動にどういう反応をしたらろう。

なにをいってもだめよ。マルタは悪い子じゃないわ。あの子が、あたしたちの暮らしにがまんできないからって、あの子を責めるわけ？ あの子の恋人がネズミ取りの男のあとについていったからって、あの子をなじるわけ？ 褐色の連中の罨にはまったのは、ギュンターだけじゃないでしょ。(中略) あたしはいつも、大きな理想のためにがんばってきたわ。だけど、ああいう小さな子の将来を考えると……。あたしたちはずっと働きずくめ。なのにまだこんなところで暮らしている。これでいいのかしら？ あたしたちにも、ちょっとはエゴイズムがあってもよかったんじゃないかしら。マルタがあたしたちを責めているのは、そのことなのよ。(233-234頁)

母は、現状をなかなか変えられないもどかしさから、マルタの「エゴイズム」に同情的だ。だがそれに対して父はいう。

それはちがうぞ、マリー (中略) 大局で平和になれないかぎり、どこにも平和はないんだ。あるのは願望だけだよ。(235頁)

両親の意見の相違は、マルタが口にしてきた「大きな幸福」と「個人のささやかな幸福」そのままだ。そして平和な国で暮らし、戦争から遠いところにいるように感じているわたしたち日本の読者の多くも、じつは日々選択を迫られている。「大きな幸福」か、「個人のささやかな幸福」か、わたしたちはいったいどちらに軸足を置いて、日々ものごとを考えているのか。ベルリン3部作を読み返すたびいつも身につまされる。

第3作『ベルリン1945』は第2次世界大戦末期から無条件降伏したあとのソ連占領下のベルリンを描いている。第1作で主人公だったマルタの兄ヘレ(当時13歳)は第2作でナチに抵抗し、逮捕される。そのとき、生まれたばかりの娘がいた。第

3作はその女の子エンネ（12歳）の目を通して描かれる。マルタはギュンターと結婚し、家を出ていた。1934年にはナチ党員にもなっていた。空襲で焼けだされ、ギュンターも1943年には戦死し、小さな子ども二人を連れてマルタが家に帰ってくる場面がある。そこでマルタはこう弁明する。

あの頃、あたしとギュンターははじめて暮らし向きがよくなったの。ナチはいろいろ過ちも犯したけど、最後にきっと貧困をなくしてくれると信じたのよ。

（中略）それに、ヒトラーを賛美したのはあたしただけじゃなかったし……あんなにたくさんの人が勘違いをするわけがないって、あたし、てっきり……

（557-558頁）

マルタとふたりの息子がその後どうなったかはここでは語らずにおく。ぜひこの3部作を読んで確かめてほしい。

「わたしはどうしても知りたかった」

コルドンは2014年11月の講演のために書き下ろした原稿の中でこう書いている。

正直いうと、3部作の第1作『ベルリン1919』を書きあげたとき、もう二度とこんなものは書かない、といったものです。こういう小説を書くには、おびただしい調査が必要です。その上、ささいなことにこだわる歴史家もいます。それに、時代の証人が語る、目を覆わんがばかりの記憶をたどり、きわめて悲惨な時代にもぐる必要もあります。ストレスのかかる、心が傷つく作業です。けれども好奇心の方が勝ったのです。わたしが創作し、わたしの中で生きているヒーローとアンチヒーローがいったいどうなっていくか、わたしはどうしても知りたかったのです²。

ここから、コルドンが最初から登場人物たちの半生をプログラムしていたわけではないことがわかるだろう。むしろ確定した「歴史」の上に乗せたとき、さまざまな家庭環境と心情をもった人々が、そのときどきにどのような選択をしたかを綿密に考察しながら描き分けた大いなる実験だったともいえる。だからこそ、きっと無数にいる登場人物のだれかに、読者は等身大の自分を見つけることになる。それはマ

² 『ドイツの児童文学作家 クラウス・コルドン講演会 わたしの物語作法―「古き」ベルリンの若者たちの今』大阪国際児童文学振興財団, 2015, p. 13

ルタや、彼女の両親、兄や弟だけではない。第1作で主人公ヘレの仲良しだが、裕福な家庭で育ち、やがて音信不通になるフリッツも、第3作でふたたび片腕をなくした大尉として登場する。いつも腹ペこで、食べ物をねだってばかりいたちびのルツのような貧乏くじを引く者もいる。彼はひもじさゆえにナチ党员になり、第3巻では……。もちろんナチの時代にも、ソ連占領下でも、権力の側についてうまい汁を吸う、もっといけすかない反面教師もいる。その一方で、第1作では蜂起した水兵のひとりとして革命の先頭に立ったハイナーのような人生もある。彼は第2作で刑務所から脱獄し、ソ連に亡命する。第3作で粛清の嵐が吹き荒れたスターリン統治下のソ連からもどった彼が残した言葉は重い。

時代の万華鏡

コルドンは、上に引用した講演録で、「ベルリン3部作」を書くにあたって助けを借りた時代の証人についても触れている。

わたしがそういう時代の証人をどこで見つけたと思いますか？ 20世紀の終わり、ベルリンにはたくさんの『おしゃべりカフェ』が存在しました。そこには自分の若い頃や、自分が住んでいる地区がかつてどんな様子だったか語ってくれるお年寄りが集まっていました。それは古きベルリンを生き返らせる物語の数々でした³。

こうやって出会った時代の証人の多くが、作品のモデルになっているようだ。世代や生い立ちも違えば、世界観や政治信条も異なる無数の登場人物が、コルドンの脳内で再構成された「ベルリン」を行き交い、悲喜こもごもの心情を吐露する。彼らは、あの時代を生きたベルリン市民の縮図だ。全作を通読したとき、読者はきつと命の通った万華鏡を目の当たりにするだろう。

この再構成された「ベルリン」でもっとも重要な場所は、いうまでもなくゲープハルト一家が住んだアッカー通り37番地のアパートだ。コルドンが描いた「ベルリン」は当時そのままにリアルだが、1ヶ所だけ例外がある。それがアッカー通り37番地だ。ここには1844年以来、聖エリーザベト墓地がある。1949年以降、東ベル

³ 同注2 p.16

リン側となり、「ベルリンの壁」のすぐ内側に位置した墓地だ。両世界大戦の戦没者のものとわかる墓石も少なくない。

1998年、「ベルリン3部作」の舞台を訪ね歩き、はじめて37番地を訪れた。それまでそこが墓地であることを知らなかったわたしは、その番地に辿りついたとき、小さな門の奥を見て茫然となった。花束を持って人待ち顔の初老の婦人に、「この墓地は戦前からあったのですか」と訊ねた。「そうだ」という返事をもらうと、わたしは迷惑も顧みず、一気呵成に「ベルリン3部作」の話をしてしまった。そこが長い歳月にわたってベルリンに生きた人々の鎮魂の場所だと気づいたからだ。

(さかより しんいち ドイツ文学者、翻訳家、和光大学教授)

ドイツの子どもとクラウス・コルドン

マライ・メントライン

ドイツ人作家クラウス・コルドンの児童書や YA（ヤングアダルト）小説に接すると、扱われているテーマの真面目さと重さに驚くかもしれません。

日本での講演会の際、来場者から決まって同じ質問が来ます。「ドイツの子どもは日常的にこんな（大人向けにしか



見えない) 内容の本を読んでいるのか?」と。この質問に対する答えは「読んでいます。」です。しかし、その理由について詳しく述べておく必要があると思います。

そこで、なぜクラウス・コルドンのような「戦争」「歴史」をテーマとして扱う作家がドイツの子どもによく読まれてきたか、また、学校ではどう対応しているのかについて、この場で述べてみることにします。

まず、ドイツの学校での国語（つまり「ドイツ語」）授業について。

私がコルドンの本に出会ったのは、おそらく小学校を卒業した後、5年生か6年生ぐらいの頃です。ドイツの小学校は日本の小学校と違い、4年しかありません。ゆえにドイツの場合、日本より2年早く次の成長ステップを踏まなければなりません。

小学校卒業後、3つのタイプの学校のどれかに入学します。それぞれ、学ぶ内容と生徒に求めるレベルが異なります。どの学校を最終的に卒業するかによって、将来の仕事がだいたい決まります。また、大学進学資格であるアビトゥアを取得できるのは3つの内、ギムナジウムと呼ばれる、12年生まで通う学校だけ。ドイツの学校は基本的に無償で、入学試験もありません。小学校の次に通う学校をどれにするかは、小学校4年間の成績をもとに、担任の先生が親と一緒に決めます。私の場合、ギムナジウムというタイプの学校に入学したので、その授業内容をベースに説明し

たいと思います。

小学校の国語授業では読み書きや短文作成の練習が主な内容だったのに対し、ギムナジウムでは論理的な作文を書くことが授業の中心となります。先生が決めた小説を生徒たち全員で購入し、教室で読んだり、宿題として決まった数の章を読んだりした上で、小説の内容について議論します。

議論で一番大切なのは「解釈」です。本を読んでどう感じたかというよりも、作家の狙いや作品の「意味」について話し合います。自分が思ったことを他の生徒にぶつけて、その反応と再解釈のサイクルで議論が進むのです。

先生は司会の役割を受け持ちます。試験の際、授業の中で読んだ小説の内容について、生徒に意見を求めます。そこで最も重要な評価基準となるのは、いわゆる「定説」に近い答えを出すか否かではなく、自分の解釈をいかに論理的に裏付けることができたか、つまり、思考としての質の高さです。もちろん倫理的・道徳的な大枠はありますが、自由度は高く、かなり幅広い「正解」があり得るわけです。あらかじめ決まった回答から選択するような試験スタイルはありません。

議論し、話し合いを重ねながら小説を読んでいると、子どもであっても、少し難しい話や、死を扱うような内容への感情的な抵抗が自然に低減してくると思います。残酷な現実について毎日ニュース報道などで接してしまっている以上、それらから機械的に子どもを遠ざけるのではなく、たとえばコルドン作品のような良質の小説を通じ、起きている出来事に対する理解を深めるようにするのが、ドイツの教育方針なのだと思います。

また、第二次世界大戦の加害者であるドイツは、同じ過ちを繰り返さないための教訓プロセスの一環として、歴史を忘れないこと、出来事を深く理解することを学校の授業で徹底的に求める、という固有の事情もあります。

クラウス・コルドンのベルリン3部作は、まさに「出来事を深く理解する」ための小説です。第二次世界大戦への道はナチス政権でいきなり始まったのではなく、第一次世界大戦の敗戦から蓄積し、熟成してきた巨大な悪の構造です。貴族を中核とした帝政時代以来の社会的保守派と、伝統社会のシステムを変革することを目指す右派と左派、この三つの大きな流れを理解する必要があります。「結果をすでに

知っている」学校の歴史授業と違い、まだ未来の展開を知らない当時の人々の視点や思考をわかりやすく、生き生きと描くのがコルドン作品の真価です。彼は家族、愛、友情、将来への不安といった子どもにとって関心が高いテーマを織り込み、さらに様々な年齢の登場人物を登場させながら、歴史・社会小説としてよく練られた骨太のプロットを構築します。やはりコルドンは、数多のドイツ児童文学・YA作家の中でも最も傑出し、そして真摯な作家だという印象があります。

クラウス・コルドンは自国の歴史だけでなく、たとえばインドなど、外国を舞台にした作品を書くことが多いことでも知られています。そう、実は私の場合、外国の子どもたちの生活を描く小説を読みたくて、児童書・YA専門書店でオススメの本を訊ねたのがクラウス・コルドンとの出逢いだったのです。この領域の彼の作品で日本語に訳されているのが『モンズーンあるいは白いトラ』のみ、というのは個人的にとっても残念ですが、ドイツ人作家による外国についての小説をさらに日本語に訳すのは、確かに商業的な面でなかなか難しい話かもしれません。また、コルドン自身の東ドイツでの生活体験をベースとした作品群も非常に価値があるのですが、日本ではやはりナチ時代のほうが圧倒的に耳目をひくので、紹介する機会がなかなか出来ないのが残念です。

最近、私より年下のドイツ人の若者にクラウス・コルドンを知っているかと聞いてみました。当然知っている、名前を聞いたことはあるという人たちの一方、平然と「知らない」と答えた人もいました。たまたまの可能性はありますが、時代の変化が関係しているかもしれない、という予感がします。

コルドンの作品は「人の内面と動機」の核心をわかりやすく、共感できるように描くのが特徴です。私のような現在30代の世代には、実際に戦争を体験している親類縁者がいて、彼らから得る体験談の「リアリティ」が、コルドン作品を読んで得る「エッセンス」と混ざることによって、深い理解と知的関心を湧き立たせた気がします。当時の社会、そしてナチ体制に対する期待や反発、加担と抵抗の複雑な実相が多面的に見えてくるからです。

しかし、この後の世代、戦争直接体験世代の縁者を持たない若者たちにとって、その辺りの事情は異なってきます。コルドン作品は、自分たちと直接のつながりを

もたない時代を描く「過去の名著」として読まれることになる可能性が高いのです。遠からず発生する「戦争直接体験世代の消滅」という避けがたい現実に対し、社会教育上、いかに知的精神的なロスを最小限に抑えるか……それは、ドイツの教育・文芸界にとって重要な課題です。ナチ時代について「あれは過去の話。自分たちならあんなことしないでしょ。」と安直に考える流儀が広まることだけは、何としても避けたいところです。

いまクラウス・コルドンは、1848年のドイツ3月革命を、そしてさらには1812年のナポレオン戦争を題材とした歴史小説のプロジェクトを進行させています。それらの作品は、あのベルリン3部作の祖先譚となるようです。もしそうであれば、これは、先述した「世代」問題への、作家としてのひとつの回答であるように思えます。

歴史体験の実感、つまり自分そのものが決定的に「過去」の存在となるならば、さらに大過去の時代とのつながりを軸に大河歴史小説をつくりあげ、ドイツ通史から改めて人間とところの本質を考え、吟味し、現在と未来の社会を強力に照射する……。

これがクラウス・コルドンという作家の最終形態なのかもしれません。彼は、未来の子どもたちに自分の精神的蓄積を生かしてもらうにはどうすればよいのかを考えています。歴史と同時に社会の現状を直視し、その中で自分はどうあるべきかを常に問い続ける作家。実は、彼の作品だけでなく、作家としての姿勢から得られるものも大きいのです。

(マライ・メントライン エッセイスト、翻訳・通訳者)

平成26年度子ども読書連携フォーラム

はじめに

国際子ども図書館（ILCL）では、子どもの読書に関わる連携協力の促進を目指して、平成25年度から「子ども読書連携フォーラム」を開催している。これは、「児童サービス連絡会」（平成19年度から平成21年度）、「児童サービス協力フォーラム」（平成22年度から平成24年度）の後継企画として実施しているものである。

2回目となる平成26年度は、平成27年3月2日（月）に、「子どもの本の選書を考える—知識の本を中心に—」をテーマとして、公共図書館や学校図書館の担当者など83名の参加を得て開催した。参加者のうち図書館員には事前に各館の選書の現況と課題等を把握するためアンケートを依頼した。同時に、実際の選書で不足を感じる分野や紹介したい知識の本を提示してもらい、運営の参考にした。第1部では、概況報告とパネルディスカッションを行い、第2部では第1部を踏まえて参加者によるグループディスカッションを行った。その概略を報告する。

国際子ども図書館の概要・子どもの本の選書

第1部冒頭に、ILCL 児童サービス課長西尾初紀が報告した。ILCL では子ども向けの閲覧室「子どものへや」で、職員がフロアワークやおはなし会、小展示等の直接サービスを行っている。西尾は、当該室の開架資料がこれらサービスの基盤であり、選書は全てのサービスの根幹となっていると述べた。

また、ILCL は納本図書館である国立国会図書館の支部として、第一資料室には、その年に納本によって収集した国内刊行児童書を開架で提供しているため、「子どものへや」の知識の本に関しては、職員がその年に刊行された全ての資料に目を通して選書しているという実践を紹介した。最後に、ILCL が作成した選書ツールのリスト等を紹介した。

講演「事前アンケートから見える選書の課題」

続いて、堀川照代青山学院女子短期大学教授による講演があった。氏は、事前アンケートで挙げられた選書業務における課題を、①出版・流通、②資料購入予算、

③選書組織・状況、④選書技能、⑤購入、⑥ニーズ、⑦提供・利用・評価に分けて分析し、アンケートで多くの参加者が最大の課題としていた、選書の経験値・技能向上の方法は、自分でいろいろな本を読んで、自分なりの選書の「ものさし」を作ることであり、そのものさしを持ち得た人がプロの児童図書館員であると述べた。



ニーズについては、特に学校図書館では、選書内容と教員のニーズとのギャップを回避するため、図書館員が教科書を読んで授業内容を把握すること、そして、ただ排架して貸し出すだけでなく、選書した資料がどう使われたか、子どもたちの理解レベルや学びの目的に合っていたかを評価し、選書にフィードバックして、また利用者に本を手渡すことが大切であると述べた。

パネルディスカッション「子どもの本の選書を考える—知識の本を中心に—」



はじめに、静岡県立中央図書館の鈴木由美氏から、同館の概要、選書業務及び県下の図書館の選書を援助する事業について説明があった。氏によれば、同館は、県内の公共・学校図書館の児童図書資料の充実及び選書に携わる職員の資質向上を図るため、新刊児童図書巡回展示研修会を行って

いる。年1回、県内の市町立図書館のいずれかで実施するこの研修会では、同館が全点購入する新刊児童図書のうち約1,000冊を研修会場に展示し、担当職員が選書に関する研修を行い、参加者の相談に応じており、地域の図書館での選書と図書館員の選書技術の向上に役立っている。また、年4回開催する「新刊サロン」は、最近1か月に受け入れた新刊児童図書について自由に語り合う会であり、学校司書、公共図書館職員、ボランティア等による活発な意見交換の中で、立場による評価の違いを互いに知ることが、児童書の多角的な評価につながっているという。

次に、千葉県浦安市立中央図書館の伊藤明美氏から、同館の概要紹介及び選書の

実際や留意点についての報告があった。氏によれば、同館は、館内でのフロアワークに加え、年間956回、保育園、幼稚園、小学校等の類縁機関に出かけて読み聞かせやブックトーク等を行い、その実践が同館の児童サービスを育ててきたという。また、科学の本の選書時の留意点として、科学の本には、①頭で考える本、②目で見える本、③手で試す本があるので、どれに該当するか考えながら選書すること、調べ学習用の本だけでなく、子どもの興味を伸ばすような資料も必要であること、写真や図表などのビジュアルばかりではなく、説明がきちんと文章で示されている資料も大切であると述べた。また、知識の本の選書に当たっては、その時に必要な本を選ぶ短期的視点と、今後蔵書としてその本がどのように役立つかを考える長期的な視野が必要であり、その本を生かしたサービスを想定することを心掛けているとのことだった。そして、選書には、図書館員による評価、子どもの反応の把握、出版社へのフィードバックが重要であり、このフォーラムが、本を手にした時の子どもの反応や、児童図書館員が望む知識の本について出版社に伝える役割を果たすことを期待したいと結んだ。

最後は、荒川区立尾久小学校学校司書の鳥海裕美氏から報告があった。氏は、課題を解決するために本を読んで調べるのも知的好奇心を育む読書であり、学習センターとしての学校図書館の機能を強化するためには、知識の本を適切に選書することが大切であると述べた。また、学校図書館での選書は、計画的、組織的に行って図書館資料を有効に利用し授業に活かすことを主眼としているので教員と司書の連携が肝要であり、教員からのフィードバックを反映するため、同校では年度末に1年間の指導を振り返り、各教科の单元ごとにどのような資料が必要か、意見交換を行っているという。また、「学校図書館メディア基準」に照らし、授業に活用できる偏りのない蔵書構成になるよう留意していることに加えて、良い選書をしただけでは児童は本に手を伸ばさないので、児童の関心を本に向けるような全校的な取組が大切であると語った。

パネリストによるディスカッションでは、選書の経験値を上げ、鑑識眼を磨く方法について堀川氏が尋ねたところ、鈴木氏は、とにかく多くの子どもの本を読み、各種の勉強会や研修会に参加するようにしていると答え、伊藤氏は本をたくさん読んで自分の中にストックを持ち、新しい本と向き合った時にはそのストックと照ら

し合わせて判断することと、子どもの声を聞き流さないことと答えた。鳥海氏は、実際に子どもたちが読んで理解できる本かどうか、手に取って少しでも多くの資料を見ること、他の学校司書からの意見も聞くようにしていることと述べた。また、ILCLの第一資料室に休日に通い、過去1年分の児童書を見ているとも述べた。

参加者ディスカッション

第1部の内容で参考になったこと、自館で取り入れられそうなヒント・気付きをグループに分かれて発表し、意見交換した。参加者の多くがフィードバックや、基本図書を読んで鑑識眼を養うこと等の重要性について参考になったと述べていた。



おわりに

最後に、堀川氏が、児童図書館員は本を読み、子どもと本を会わせ、勉強会や研修会に積極的に出ることが重要であり、本日はフォーラムのテーマである選書をきっかけに交流を深め、次につなげて欲しいと締めくくった。

フォーラム終了後も、会場に多くの方が残り、グループでの熱心な討議や交流が1時間近く続いた。

当館は、今後もこういった現場業務に役立つ情報を全国に発信し、児童サービス関係者の交流の場を提供することによって、児童サービス現場からの期待に応えていきたい。なお、本フォーラムの記録は ILCL ホームページに掲載している。

(URL:<http://www.kodomo.go.jp/study/cooperation/forum2/index.html>)

(児童サービス課)

電子展示会「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」提供開始

国際子ども図書館は、平成26年6月20日に、電子展示会「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」(<http://www.kodomo.go.jp/yareki/>)の提供を開始しました。

この電子展示会は、中高生が楽しみながら日本の近代史を学べるよう、幕末・明治の日本の歴史を事典形式で紹介するインターネット上の展示会です。史料や肖像のデジタル化画像など国立国会図書館ならではの貴重な資料を活用しています。



「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」トップページ

「大日本帝国憲法」の草案などの史料画像に分かりやすい解説を付けた「史料編」(5項目)、坂本竜馬などの人物の肖像とともにエピソードと関連する本を紹介した「人物編」(26人)、「ペリー来航」などのテーマに関連した画像とミニ解説をセットにしてスライドで見せる「テーマ解説」(14項目)で構成されています。ほかにも、「史料入門」、「筆跡当てクイズ」、「錦絵ギャラリー」、「年表」、「索引」などがあります。

興味を持った一つの事項や人物から、次々とリンクをたどって知識を広げていける内容となっています。ぜひご覧ください。

(児童サービス課)

児童書検索に役立つデータベースの御紹介

—NDL-OPAC、国立国会図書館サーチ、国立国会図書館デジタルコレクション

国立国会図書館（NDL）国際子ども図書館（ILCL）では、利用者からの所蔵資料に関する質問にお答えする「レファレンス・サービス」を提供しています。その中でよく受けるのが「昔読んだ本を探しているのですが、タイトルを教えてください。」という質問です。大人になってから、ふと子どもの頃に読んだ懐かしい本を思い出し、再び読んでみたくなる方が多いようです。NDLでは、このような資料探しに役立つデータベースをホームページで提供していますので、その使い方を簡単に御紹介します。

検索を始める前に

まず、その本に関することを可能な限り思い出し、調べる範囲を設定します。具体的にはストーリーや登場人物、いつ頃読んだか、自分で読んだか読んでもらったか、絵本か読み物か、1冊に1話か短編集か、日本のお話か外国のお話かなどの情報が必要です。

何歳頃に読んだかは、比較的思い出しやすいものですが、自分の年齢から読んだ年を導き出すことができるので、特に重要な手掛かりになります。年に幅があってもかまいません。何年までに出版された本であるという情報があれば、数10万冊にもものぼる児童書の中から検索対象を絞り込むことができます。読んだ当時の年齢からは、本の難易度についても概ね見当を付けることができます。

続いて、データベースの検索に使用するキーワードを考えます。例えば、子どもが山に出掛ける物語を探しているなら、「山」のほか、「山のぼり」や「ハイキング」などもキーワードになり得ます。イメージを少し膨らませると、「遠足」も浮かんできます。別の言葉で言い換えられないか想像力を働かせ、タイトルやあらすじに含まれていそうな言葉を考えます。

手掛かりはあるほど探しやすいものの、実はその全てが正しいことはあまり多く

ありません。時が経つうちに頭の中で名前が書き換えられたり、挿絵が白黒からカラーになったり。記憶と完全には合致しなくても、それが探していた本だったという事例がたくさんありますので、一致する点のある本は確認してみるとよいでしょう。

国立国会図書館蔵書検索・申込システム (NDL-OPAC)

国立国会図書館サーチ

準備ができれば、データベースを検索します。まず、「国立国会図書館蔵書検索・申込システム」(NDL-OPAC) (<https://ndlopac.ndl.go.jp/>) と「国立国会図書館サーチ」(NDL サーチ) (<http://iss.ndl.go.jp/>) について御案内します。

NDL-OPAC は NDL の所蔵資料を検索できるデータベースです。NDL は、納本制度に基づき、国内出版物を網羅的に収集・保存しているのです。NDL-OPAC を検索すれば、国内でどのような児童書が刊行されたか、ある程度調べることができます。

お探しの本を NDL が所蔵していなくても、他機関で所蔵しているのが見つかる場合もあります。NDL サーチは、NDL の所蔵資料・提供するコンテンツのほか、他機関の所蔵資料なども統合的に検索できるデータベースです。ILCL を含む NDL と国内の7つの主な児童書所蔵機関の所蔵する児童書・関連資料を一元的に検索することができる「児童書総合目録」も提供しています。

また、NDL サーチでは、NDL が全国の図書館等と協同で構築している「レファレンス協同データベース」(<http://crd.ndl.go.jp/>) に登録されたレファレンス事例等も検索することができます。「レファレンス情報」を選択して検索すると、探している本について過去に他の図書館で調査した事例が見つかることがあります。

タイトルや著者の分からない児童書を探す際には、NDL-OPAC と NDL サーチを、あらずじに含まれていそうな言葉で検索するのが便利です。

NDL が所蔵する児童書はあらずじから検索することができます。このあらずじは、日本図書館協会と日本児童図書出版協会から提供された内容解説情報で、1950年以降に刊行された児童書の書誌の一部に付与されています。あらずじには物語の内容やテーマ、登場人物や舞台となる土地の名前など様々な情報が記載されている

ので、あらすじから検索すると、タイトルからの検索より幅広いキーワードで探すことができます。

NDL サーチであらすじを検索するには、「簡易検索」を使用します。検索窓にキーワードを入力し、「児童書」ボタンをクリックします。**NDL** サーチで検索対象を「児童書」とすると、児童書総合目録を検索します。あらすじがある場合には、詳細情報の「要約・抄録」欄に表示されます。簡易検索では、あらかじめ出版年で検索範囲を区切ることができませんが、検索後に出版年で絞り込むことができます。

NDL-OPAC の場合は、「詳細検索」で「キーワード」欄に検索したい言葉を入力して検索します。出版年を指定することもできます。児童書を検索するには、資料種別を「図書」、所蔵場所を「国際子ども図書館」に設定します。ただし、探している本がヤングアダルト向けの読み物の場合には、東京本館所蔵のものもありますので、所蔵場所を「全館」とします。あらすじがある場合は、書誌情報の「あらすじ」の欄に表示されます。

あらすじの検索に当たっては、留意すべき点が3つあります。

1つ目は、あらすじだけを対象とする検索ができないことです。そのため、検索語がタイトル、件名など他の項目に含まれ、あらすじには含まれていない場合もヒットします。

2つ目は、「山」のような1文字のキーワードで検索するときには、**NDL** サーチを使うということです。**NDL-OPAC** では、システムの制約で1文字の検索語では検索できない場合があり、そのキーワードを含む資料も網羅的にはヒットしません（スペースや記号で区切られている場合にヒットします。）。

3つ目は、キーワードの表記や語句を様々に変えて検索する必要があることです。タイトルや著者は、データに読みが付与されているので、ひらがな・カタカナでも検索できますが、あらすじは文中の表記どおり、漢字で書かれた部分は漢字で、かなで書かれている部分はかなで入力しないとヒットしません（ひらがなとカタカナは区別せずに検索します。）。また、「山」でヒットする資料が、「山のぼり」でヒットする資料に必ず含まれるとは限らないため、共通する部分のある語句でも個別に検索します。

国立国会図書館デジタルコレクション

お探しの本が古い物なら、「国立国会図書館デジタルコレクション」（以下、デジタルコレクション）（<http://dl.ndl.go.jp/>）も検索します。1968年までに受け入れた児童書、1970年までに刊行された児童雑誌（小学館の学年誌は2000年刊行分まで）は、本文のデジタル化画像をデジタルコレクションで提供しています。インターネットでは著作権処理の完了したもののみを公開していますが、収録資料の書誌情報・目次は NDL 館内と同様に見ることができます。

デジタルコレクションには目次情報があるので、短編集や雑誌に収録された作品を探す際に便利です。あらすじを検索するには、詳細検索の「キーワード」に入力します。あらすじがある場合、「解題」欄に表示されます。ただし、あらすじが入力されている資料は少ないので、デジタルコレクションでは主にタイトルや目次に含まれるキーワードを想定して検索することになります。検索対象を児童書に限定することはできませんが、検索結果を請求記号順に並べ替えると、資料群ごとに表示され、調べやすくなります。デジタル化された資料の場合、NDL-OPAC の書誌情報にデジタルコレクションへのリンクがあるので、検索は NDL-OPAC でいい、その後、デジタルコレクションで閲覧することもできます。

NDL サーチの「詳細情報」、NDL-OPAC 及びデジタルコレクションの「書誌情報」を見ると、タイトル、著者、出版年、本の大きさ、ページ数、あらすじがあればストーリーや登場人物について分かるので、覚えている情報と照合します。それが探している本かもしれない場合、図書館や書店に行く前に、インターネットでその本について調べてみるとよいと思います。出版社のホームページや絵本情報サイト、ブログなどで表紙画像や本の内容紹介が見られる場合があります。

NDL サーチで検索した場合には、詳細情報の「見る・借りる」に、児童書総合目録参加館のほか、その本を所蔵する都道府県立・政令指定都市立図書館が表示されます。また、「入手する」の「書店等で探す」をクリックすると、インターネット書店などのウェブサイトを検索することができます。

以上、児童書を探す際に検索する NDL のデータベースを御紹介しましたが、実際のレファレンスでは、物語のテーマや登場人物の名前などから検索できる参考図書も参照します。調べものに役立つ情報を提供する NDL のウェブサイト「リサーチ・ナビ」(<http://rnavi.ndl.go.jp/rnavi/>)内の「児童書をさがす」(<http://rnavi.ndl.go.jp/childbook/index.php>) のページで、調べ方のノウハウとともに参考図書やウェブサイトなどの検索ツールを御案内していますので、こちらもぜひ御覧ください。

(資料情報課)



「国立国会図書館サーチ」トップ画面

第80回国際図書館連盟（IFLA）年次大会報告

西尾 初紀

世界の図書館関係者が集う標記大会が2014年8月16日から22日まで、パリの北西約400kmにあるフランス第2の都市リヨンで開催された。児童ヤングアダルト分科会（以下「YA分科会」）では2回の常任委員会と、他の分科会との共催を含む4つの講演会を開催したほか、大会終了後、パリで学校図書館分科会との共催によりサテライト・ミーティングを実施した。筆者は同分科会常任委員代理として出席した。



IFLA リヨン大会開会式

常任委員会

「児童図書館サービスのためのガイドライン」の修正案の承認に加え、ソーシャル・ネットワーク・サービス（SNS）が普及する中、親や図書館員が子どもたちのプライバシーや安全を守るための指針「ソーシャルメディアと児童・青少年 @ 図書館」¹が提案、承認された。日本でも「LINE いじめ」が問題となっているが、外国でも「I H8 U」（=I Hate You）等、容易に相手を深く傷つけるメッセージが蔓延しているようだ。

本誌13号²でも紹介したように、各国の司書が自国の代表的な児童書10冊ずつを選んだ巡回展「絵本で知る世界の国々—IFLA からのおくりもの」のセットの一つ

¹ http://www.ifla.org/files/assets/libraries-for-children-and-ya/publications/social_media.pdf

² http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8305898_po_2013-mado.pdf?contentNo=1

は日本に寄贈され、国立国会図書館国際子ども図書館（ILCL）がアジア諸国と日本国内への貸出しを担当している。巡回開始後に追加で本を送ってくる国もあったが2014年秋で追加を締め切り、同年内に、現在品切れ中の展示カタログの改訂版を刊行する計画が示された。カタログでは本の内容紹介がない国もあるが、日本の展示会来場者からは内容を知りたいという要望が多いため、改訂版にはあらずじを盛り込むよう求めたところ、改訂版には大幅なレイアウト変更等を要さない程度で記載される運びとなった³。また、会場では平成25年度の貸出し先の韓国の国立子ども青少年図書館の館長及び仁川市立スホン図書館の主任司書にお会いすることができた。

ロシアの委員が「絵本で知る世界の国々—IFLA からのおくりもの」に続く新しい企画として、マンガ等も視野に入れた「青少年向け図書で知る世界の国々」プロジェクトを進めてきたが、図書に限定せず、若者への読書活動推進の取組も紹介すべき等の意見が出され、議論は決着を見なかった。

講演会及びサテライト・ミーティング

講演会及びサテライト・ミーティングの日程及びテーマは次のとおりであった。

8月19日	講演会：児童・ヤングアダルト向けに／児童・ヤングアダルトと共にコンテンツを創る図書館 講演会：児童・ヤングアダルトのニーズに向き合うアフリカの図書館（アフリカ分科会主催）
20日	オフサイト・ミーティング：児童・ヤングアダルトのための文化的橋渡しとしてのトランスメディア（於：リヨン市立図書館パール・デュエ本館）
21日	講演会：世界を広げよう：児童・ヤングアダルト図書館のための参加型 IFLA プログラム
23日	サテライト・ミーティング：世界の15-20歳たちの読書：どうして？どこで？どのように？（於：フランス国立図書館フランソワ・ミッテラン館（新館）、パリ）

今回の YA 分科会の中心テーマの一つは「トランスメディア」(transmedia) であり、これが今の児童図書館界のトレンドのようである。後に YA 分科会ニューズレター⁴の2015年6月号でも取り上げられた。従来なら、読後に感想文を書くな

³ <http://www.ifla.org/publications/ifla-professional-reports-136>

⁴ <http://www.ifla.org/node/9632>

ど、紙の本を受容して、紙でフィードバックするという活動が主だったが、今は、受けた感銘を映像で表現、発信したり、画像、動画、音声を組み合わせて新たなデジタル作品を創作したりという、紙に捉われない表現が可能となった。今や、そのような子どもたちの活動を図書館がサポートするという。サテライト・ミーティングでは、本のストーリーの映像化に際し、図書館が撮影場所を提供した取組や、マイクロチップを埋めた本にタブレットをかざすと画面にクイズや映像・音声付解説等が表示される仕組み等、様々な試みが発表された。ただ、それらの成果物を図書館資料として再活用する視点や、素材にした情報・資料の著作権に関する配慮等に触れた発表は少なかった。全体的に、「メディア変換をしてはネットで配信」という風潮には安直さが漂い、読書の喜びを与えるどころか本離れを加速させる危険も感じられた。また、図書館内に3Dプリンターを設置して子どもたちに自由に使わせているとの発表も多かったが、これも図書館の存在意義を希薄にさせるのではないかと気になった。

リヨン市立図書館とリヨンの本屋

リヨ市内全9区には市立図書館が15館も設置されており、本館は市の玄関口パル・デュエ駅の前、巨大商業施設の隣にある。8月20日のオフサイト・ミーティングはこの本館の会議スペースで行



リヨン市立中央図書館本館児童書フロア

われ、会議終了後には職員の案内による館内見学が行われた。最下階が全て児童書フロアになっているが、窓が大きくとられていて、外側にもドライエリア（空堀）が確保されているので暗さや閉塞感はない。通常の書架のほか、絵本の表紙がよく見えるよう低めのワゴンのような書架も多数配置されていた。使うときには図書館員に声をかけるよう貼り紙がしてあるが、パソコンとタブレットは自由に使える

ようになっている。小学校に上がりたてぐらいの子どもたちがタブレットを使っていた。また、日本でもよく商業施設で見かけるような、クッションブロックを並べた保護者と乳幼児の遊戯室も設置されていた。

訪問時にはちょうど「絵本で知る世界の国々—IFLA からのおくりもの」展を開催していた。児童室の入口には、この展示会のポスターを引き伸ばしたものと、大きな世界地図が貼られており、地図上の各大陸から色テープが床を伝って伸び、閲覧室内に設置された特設展示コーナーの各国の絵本までガイドするという趣向が凝らされていた。



サン=テグジュペリと
星の王子さまの銅像

リヨンは『星の王子さま』の作者サン=テグジュペリの故郷で、生家にほど近いベルクール広場には作者と「星の王子さま」の銅像が建っている。

広場の北東の目抜き通りには、フランス国内はもとより海外にも支店を広げ、オンライン書店としても国内最大手の一つである **Fnac**（フナック）の支店がある。公園を隔てた反対側には地元で9店舗を展開する書店 **Decitre**（デシトレ）の本店がある。こちらもオンライン書店を運営するほか、財団⁵を設立して、無人の図書貸出しポストを設置するなど読書推進活動を行っている。**IFLA** 展示会場にもブースを設置し、初日は社長自らブースに立っていた姿が印象的だった。

（にしお はつき 児童サービス課長）

⁵ <http://fonds.decitre.org/>

第34回 IBBY 世界大会に参加して

佐藤 毅彦

国際児童図書評議会 (International Board on Books for Young People: IBBY) は、1953年、ユダヤ系ドイツ人ジャーナリスト、イエラ・レップマンによって設立された国際組織であり、隔年で開催する世界大会には、各国から多くの児童書・児童サービスに関わる人々が参加する。筆者は2014年9月10日から13日までメキシコ・シティで開催された第34回世界大会に参加した。



授賞式後の記念写真撮影

今大会のテーマは“The inclusion, reading as an inclusive experience” (読書とインクルージョン (包括))、スローガンは“May everyone really mean everyone” (『みんな』が本当の意味での『みんな』になれるように) であり、全ての人による、全ての人のための包括的体験としての読書に焦点が当てられた。大会では、インクルージョンという概念の下、貧富、宗教、民族、ジェンダー、障害といった相違を踏まえながら、読書を通じて共通性を見出し、全ての子どもに読書機会を提供するための取組が紹介された。

9月11日及び12日に開かれた全体セッションでは、各国の作家による基調講演が行われ、メキシコのアリシア・モリナ (Alicia Molina)、英国のデイヴィッド・アーモンド (David Almond)、アルゼンチンのマリア・テレサ・アンドルエット (Maria Teresa Andruetto)、コロンビアのヨランダ・レジェス (Yolanda Reyes) が子どもたちが読書によって自身を理解し、他者を理解する可能性などについて語った。基調講演に続くラウンドテーブルでは、少数民族の文化と言語の保存、障害がある子どものための本、図書館による学校向けプログラムなどについて議論された。また、パラレルセッションでは、子どもと本を新しいメディアで結び取組、障害のある子どもへの読書支援等、多彩な活動が紹介された。

9月10日のオープニングセレモニーでは、2014年国際アンデルセン賞の授賞式が

行われた。国際アンデルセン賞は、作家及び画家の全業績を対象に、児童文学への永続的貢献を評価して授与され、「小さなノーベル賞」とも呼ばれる。2014年は、作家賞を日本の上橋菜穂子、画家賞をブラジルのホジェル・メロ（Roger Mello）が受賞した。上橋は、読者が登場人物に寄り添って歩み、読み終えた時には初めて違う場所に立っているような物語を書いて行きたいと抱負を語った。メロは、表現の自由を奪われた1960年代から1980年代初めの軍事政権下で絵を描きながら考えを深めたと語り、また、自作絵本を紹介しながら、人生の機微を映し出す物語の力について語った。

12日には **IBBY** オナーリスト授賞式が行われた。オナーリストは、過去3年以内に出版された児童書の中から、**IBBY** の各国支部が外国の子どもたちに読んでもらいたい本を推薦するものである。今回は、150作品が表彰され、日本からは、まはら三桃『鉄のしぶきはがねる』（ライティング部門）、あべ弘士『新世界へ』（イラストレーション部門）、神宮輝夫『ツバメ号とアマゾン号』（翻訳部門、アーサー・ランサム作）が推薦された。

同日夜には、読書普及に成果を上げた活動を表彰する朝日国際児童図書普及賞授賞式が開催され、カナダの低所得者が多い地域で子どもたちに無償で本を贈呈する活動を行う **The Children's Book Bank** と、南アフリカで母語と英語による教育の普及のため、読書教材の制作などを行っている **PRAESA***が表彰された。

インクルージョンという概念を念頭に、児童書や子どもの読書について考えると、世界における貧富、宗教、民族、ジェンダー、障害といった様々な条件に起因する環境の多様性、そしてそれが産み出す問題の深刻さが改めて浮き彫りになる。世界各地で子どもたちのために絵本や児童書を作り、子どもたちに語りかけ、人と人をつなげる活動を展開している人々が一つの場所に集まり交流するこの大会では、そうした子どもの読書環境をめぐる様々な課題や取組、世界の児童書の状況について幅広く知り、国際的なネットワークを構築することができる。今回、大会に参加して、日本国内からの参加者を始め、多くの児童書・児童サービス関係者と交流を深めることができた。

（さとう たけひこ 国際子ども図書館長）

* The Project for the Study of Alternative Education in South Africa

イタリア公共図書館における児童サービス

中島 尚子

筆者は、2015年3月30日(月)から4月2日(木)にかけてイタリア、ボローニャ市で開催されたボローニャ・ブックフェアに参加し、併せて、ボローニャ旧市街中心部にあるサラボルサ図書館、フィレンツェ市にあるオブラーテ図書館の児童サービス現場を視察した。本稿では、両館における児童サービスの概要を紹介したい。

サラボルサ図書館 (ボローニャ)

4月2日(木)、ボローニャ市サラボルサ図書館を訪問した。サラボルサ図書館は、重厚な趣の旧証券取引所の建物を利用して2001年に開館した。3階建ての建物は吹き抜けで、広場を回廊が取り囲む構造になっており、明るく広々としている。この建物はローマ時代の遺跡の上に建っており、1階



サラボルサ図書館のホール

の広場のガラス張りの床を通して地下の遺跡を見ることができる。訪問時には、2015年5月から10月まで開催されるミラノ国際博覧会のテーマを意識してか、食べ物をテーマにした絵本の展示が行われていた。1階にはカフェも設置され、いかにも利用者が長く滞留したくなるような環境である。

回廊の2階部分は、新聞・雑誌、芸術分野、文学分野等々、資料の種類別に分けられた閲覧スペースが設けられている。3階には都市情報センターが設けられており、都市計画等についての情報がパネルで紹介されているほか、ボローニャ大学の学生が利用できる、ガラス箱のような個室の共同研究スペースも設置されていた。

児童サービス部門については、担当のニコレッタ・グラマンティエリ氏に案内していただいた。児童部門は1階に配置されており、0歳から3歳未満の乳幼児と保護者のための部屋と、それ以上の子どものスペースとに大きく分かれている。3歳

よりも大きい子どもたちのための部屋は更に、3-6歳向けの部屋、9-12歳向けの読み物の部屋、9-14歳向けのオープンスペース、13-16歳向けの部屋というように、年齢別に細かく区切られ、きめ細やかなサービスが行われていた。



0歳から3歳未満の乳幼児の部屋

0歳から3歳未満の乳幼児と保護者向けの部屋には、カラフルで楽しい内装が施され、子どもたちは外履きを脱いで靴下で利用するようになっており、入口脇には靴箱がある。対象年齢よりも大きな子どもが、カラフルで楽しい内装に惹かれて室内に入りたがったが、司書から赤ちゃん向けであると諭され、渋々、年相応の閲覧室に向かった

ほど、魅力的なスペースだ。様々な乳幼児向け絵本が開架されており、多言語の赤ちゃん絵本も充実している。週末には外国人ボランティア・グループによる、多言語による絵本の読み聞かせが行われており、日本人も「招き猫」という名称のボランティア・グループを作り、定期的に日本語で絵本の読み聞かせを行っている。収集資料の言語は87か国語にも及び、その言語数に見合った多くの国の家族が訪れて利用しているとのことだった。資料の収集・整理について聞いたところ、特に明文化された基準はないが、それぞれの部屋の担当司書が内容、質、対象年齢その他を総合的に判断して選書しているとのことだった。西洋言語（フランス、ドイツ、ロシア、英語等）については司書が自ら選書し、アジア等の言語についてはボランティアの協力を得ているとのことである。

また、市の社会福祉担当部署等との連携協力の下、毎週火曜日午前中には、日本では主に公民館や保健所等で行われている、小児科医による母親学級のような講座も開かれている。プログラムは10回で構成されており、妊娠から出産、産後の赤ちゃんのケアまで網羅していた。

次に、3歳以上向けの部屋を見学した。この閲覧室は、図書館の入口に最も近い場所にあって入りやすい。内部は階段や廊下で小部屋がつながっているような構造になっており、非常に広い。4歳から9歳向けの閲覧室内では、ポローニャ・

ブックフェアで行われた絵本原画展
 主賓国クロアチアの展示“Living
 Waters, Living Stories”に関連し
 たワークショップや、ラガッツィ賞
 受賞作品の展示も行われていた。訪
 問時はボローニャ・ブックフェア関
 連の展示が行われていたが、そのス
 ペースには、通常 iPad を置いて提
 供している。2人の司書とボラン



子ども向けの閲覧室の様子

ティアで本の読み聞かせも行っているが、必ずミーティングでボランティアから読む本の提案を受け、可否を司書が判断した上で行っているとのことであった。障害がある子ども向けの資料も開架で提供されている。

7-12歳向けのエリアには、ゲーム機やインターネットが利用できるパソコンも用意されていたが、これらのサービスは、電子機器・情報リテラシーの観点から図書館が提供しなければならないという司書の判断に基づいて行われている。ゲームソフトは館内で利用できるが貸出しはしないので、家でのゲーム利用を防ぐ効果もあるという。識字障害(ディスレクシア)のある子どもが利用できるようにオーディオ・ブック等も用意されている。子どもの読む本は年齢別に細かく選書され、閲覧室内でも更に細分化され排架されている。椅子等のインテリアも、子どもたちが寛いで本を読むための小さいベッドや、複数名でも一緒にパソコン画面をゆったり楽しむ、大きな野球のグローブ型の革ソファ、ポップなものからシックなものまで、利用年齢層の雰囲気やニーズに合うように、部屋ごとに様々なデザインのものを採用しており、資料の内容のみならず、サービス全体を子どもの発達と関連付けていることが感じられた。

また、13歳以上の若者向けのエリアには、教育の専門家が常駐し、ヒップホップ文化を研究するスペースも設けられていたことには驚きを禁じ得なかった。ヒップホップをテーマとした活動のほかに、芸術研究所・芸術学校に所属する若手アーティストたちによる写真や絵画の活動も行われている。次ページの写真に写っている壁画もこのスペースを利用している若者たちが描いたとのことであった。このス

ペースで若者らが作り上げたパフォーマンス等成果物は録画され、**OfficinAdolescenti** (ティーンエイジャー工房)¹というプロジェクトタイトルで、**Youtube** で配信されている。(https://www.youtube.com/user/officinadolescenti)



13歳以上の子ども向けヒップホップ研究スペース

資料提供について見れば、乳幼児向けの部屋を含む全てのエリアで、年齢相応の本、CD、DVDの個人向け貸出しが行われている。資料はデュエィ十進分類法に基づいて分類され、標示は分かりやすさを期して、アルファベットや色で区別されていた。他に言語の標示に国旗のマークも使用している。

また、書庫内では、イタリアの図書館協会、小児科医の文化協会及び子どもの健康をテーマに活動するNPO法人との協働によって行われている、赤ちゃんからの家庭における読書推進活動“**Nati per leggere**” (読むために生まれた) (<http://www.natiperleggere.it/>) の概要を説明いただき、保護者向けのガイドブックやお勧めの児童書リスト、ロゴ入りの袋等プロジェクト用の配布物を拝見した。これらは、必ず保護者が赤ちゃんを連れて行かなければならない乳児健診の際に配布されるとのことである。日本においても多くの自治体で、赤ちゃんの誕生や健診に合わせて本をプレゼントしたり、読み聞かせ体験の場を提供したりするブックスタートの活動が行われているが、イタリアでは、本そのものをプレゼントするというよりは、保護者向けに作成した、子どもに読ませたい本のリストや、図書館の利用ガイドなどがセットになっており、図書館に家族全体を引き付け、利用を促進していくところに重点を置いているようだった。

¹ イタリア語による図書館のプロジェクト名等は便宜上、該当語の後に()で仮の日本語訳を付す。

オブラーテ図書館（フィレンツェ）

4月3日（金）、フィレンツェに移動し、オブラーテ図書館を視察した。同館は、13世紀に病院を兼ねて創建された修道院を改装して、2007年から図書館としたもので、3階建ての建物内に、児童エリア、美術・歴史エリア、新聞・雑誌エリア等が配置されている。



オブラーテ図書館子ども向け閲覧室

児童サービス用のエリアは、修道院時代の名残を留める建物構造を生かしながら、非常にモダンに、魅力的に整えられていた。白い壁面に作った展示コーナーで児童書を紹介していたが、配置も洗練されて、非常に見やすく、手に取りたくなるような工夫がされている。室内では、布絵本も含む乳幼児向け資料を、分かりやすい色と形の記号でテーマごとに分類し、箱に入れて提供するなど、小さい子どもにも、保護者にも使いやすく工夫されていた。書架には、年齢別に分けられた読み物や、調べものの本、宇宙の本、ポップアップ絵本、新着資料、音楽・映像資料、外国語資料、保護者向けの本など分野や種類で分けて配置されている。部屋の奥には、半円形の広場がしつらえてあり、本の読み聞かせが行える。

2階の若者向けの部屋では、オブラーテ（Oblate）図書館が15歳から19歳までのティーン（teen）エイジャー向けに選書した資料を“Oblateen”と称して提供していた。また、コミック・漫画も資料として提供されているが、一般利用者もじっくりと閲覧していた姿は印象深く、漫画が既にヨーロッパで出版文化として定着していることを実感した。イタリアのコミック以外にも、手塚治虫の『アドルフに告ぐ』、『火の鳥』、武論尊原作、原哲夫絵の『北斗の拳』、浦沢直樹の『20世紀少年』他の日本の漫画や、韓国の少女漫画等が幅広く提供されていた。

3階にはカフェがあり、そこからは観光名所のサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂のドームがよく見える。18時から22時までは、日替わりのディナーや酒類も提供され、資料を目的に来館する利用者のみならず、夕刻の眺めを楽しむ一般客も多く訪れ、人気のスポットとなっている。回廊に設置された席では、テーブルを囲んで学生のグループが談笑したり、議論したりしている。ゆったりと読書を楽し

む利用者は、静かな閲覧室内で本に没頭している。子ども向け閲覧室では、家庭教師と思われる大人と子どもが共に熱心に勉強している。オブラーテ図書館は、居心地の良い場所、寛げる場所、調査や研究のための場所など、市民の誰にとっても目的に合った利用が可能で、公共の集いの場として位置付けられ、多くの人々に利用されているという印象を深くした。

おわりに

ボローニャ市サラボルサ図書館、フィレンツェ市オブラーテ図書館では、生まれる前から10代まで、子どもの成長段階を全て受け止め、音楽・芸術・漫画・ゲームも含めて関心領域を把握し、対象に適した細やかなサービスを提供している。加えて保護者向けの様々な啓発活動も行っており、情報リテラシーや教育レベルの向上のため、子どもの読書活動を通じて、子どもでも大人でも、家庭を丸ごと図書館に呼び込むための懸命な工夫を行っている。それらの取組は、2015年の新館開館に合わせて、新たな中高校生向けのサービスを開始する当館にとっても非常に参考になるだろう。

また、国際都市の図書館として、サラボルサ図書館が文化の多様性に配慮したサービスを提供していたことも興味深い。ボローニャ・ブックフェアで行われた対談イベント中、児童文学作家と研究者が口を揃えて、欧米を始め世界では、いまだに多様な文化の在り方に対する認識が浅いため、児童書関連分野でも更に文化の多様性に配慮した情報発信が必要だと指摘していた。当館も、国の唯一の児童書専門の図書館として、日本の児童書関連情報を海外に向けて積極的に発信していくと同時に、日本へも国際的な児童書関連情報を幅広く届ける責務があり、その点で同館の取組は非常に参考になった。

この度のイタリア訪問に際しては、多くの絵本・児童書関係者、ボローニャ・ブックフェア関係者に御指導、御助言をいただいた。末尾ながら、関係諸氏に心からの御礼を申し上げたい。

(なかじま なおこ 企画協力課)

<参考文献> アントネッラ・アンニョリ 著 『知の広場』 みすず書房、2011

平成26年4月から平成27年3月までの主なできごと

平成26年

- 4月19日 講演会「私が子ども時代に会った本—浅田次郎」
- 4月22日 展示会「絵本で知る世界の国々—IFLA からのおくりもの」(～5月25日)
- 4月23日 電子展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」公開
- 5月5日 子どものためのこどもの日おたのしみ会
- 6月20日 電子展示会「中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典」公開
- 6月21日 展示会「日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」関連講演会
「きょうの絵本 あしたの絵本—希望のかたちを求めて—」
- 7月6日 講演会「子どもの探究活動と図書館の可能性」
- 7月19日 夏休み読書キャンペーン2014(～9月7日)
- 7月23日 中高生のための「国立国会図書館の仕事」紹介(30日とも)
- 7月26日 科学あそび2014(27日とも)
- 7月29日 展示会「世界のバリアフリー絵本展2013—国際児童図書評議会2013年推薦図書展」
(～8月24日)
- 7月31日 夏休み小学生向け図書館見学ツアー(8月7日、14日、21日、28日とも)
夏休み小学生向けおはなし会(8月7日、14日、21日、28日とも)
- 8月1日 「教員のための博物館の日」に参加(～2日)
- 10月11日 講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」第8回「いま、スペイン語圏の
子どもの本は？」
- 10月19日 子どものための音楽会
- 11月5日 第16回図書館総合展に参加
- 11月10日 国際子ども図書館児童文学連続講座「児童文学とそのマルチメディア化」(～11日)
- 11月29日 クラウス・コルドン講演会「わたしの物語作法—「古き」ベルリンの若者たちの今」
(30日、大阪府立中央図書館)
- 12月7日 子どものための冬のおたのしみ会

平成27年

- 1月27日 展示会「子どもを健やかに育てる本2014—厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉
文化財(出版物)」(～2月22日)
- 3月2日 平成26年度子ども読書連携フォーラム「中高生の読書推進を考える」
- 3月22日 子どものための絵本と音楽の会『はろるどまほうのくにへ』

活動報告

(平成26年4月1日～平成27年3月31日)

1. 児童書専門図書館としての活動

1.1 資料・情報センターとしての機能

(1) 蔵書構築

国内刊行児童書を納本制度により収集したほか、未収の国内刊行児童書（与田準一（歌）・茂田井武（絵）『アシナミソロヘテ』等）、国内外の児童書関連資料、児童サービス用資料、学校図書館セット貸出用資料、主要児童雑誌の欠号等を収集した。

外国刊行児童書については、*Será mesmo que é bicho?* (Angelo Machado 著、Roger Mello 絵) 等、2014年国際アンデルセン賞受賞画家ホジェル・メロの作品を含む欧米や中国、韓国等資料のほか、平成25年度に作成した選書用ブックリストに基づくモンゴル語資料を重点的に収集した。また、平成26年度はペルーの児童書・関連書について星野由美氏に選書用ブックリストの作成を依頼した。

加えて、ボローニャ国際児童図書展事務局からボローニャ国際児童図書賞(ボローニャ・ラガッツィ賞) 応募作品279冊及びラトビア大使館から27冊の寄贈を受けたほか、国際図書館連盟 (IFLA) から「絵本で世界を知ろうプロジェクト」により集められた絵本28冊を貸出用資料として寄贈を受けた。

資料の破損・劣化対策として、ステープラー綴じ資料の錆による紙の劣化を予防するため、200冊を糸で綴じ直した。

(2) 情報サービス

○国立国会図書館サーチにおける児童書総合目録の提供

国立国会図書館サーチを通じ、国立国会図書館（国際子ども図書館を含む。）、大阪府立中央図書館国際児童文学館、神奈川近代文学館、三康文化研究所附属三康図書館、日本近代文学館、東京都立多摩図書館、梅花女子大学図書館、白百合女子大学図書館及び白百合女子大学児童文化研究センターが所蔵する児童書・関連資料の所蔵情報を一元的に検索できる児童書総合目録を提供している。児童書に限定した検索、都道府県立及び政令指定都市立図書館蔵書・各種デジタル資料・レファレンス情報等の同時検索が可能である。本年度は、東京都立多摩図書館とデータ更新の

再開に向けての調整及び更新用データの確認を行った。

※ <http://iss.ndl.go.jp/>

○国立国会図書館蔵書検索・申込システム (NDL-OPAC) への目録データ追加等

新規受入児童書資料（朝鮮語1,102件、トルコ語3件、中国語2件、モンゴル語1件）及びヘブライ語児童書資料（平成19年以前受入）の目録データを追加した。

児童書専門付加情報として、日本図書館協会から提供された『選定図書目録』平成24年分の内容解説データ及び日本児童図書出版協会から提供された『児童図書総目録』の内容解説データ、計9,322件を投入した。

※ <https://ndlopac.ndl.go.jp/>

○レファレンス協同データベースへの事例提供

各種図書館からのレファレンス事例等をレファレンス協同データベースに登録しており、平成26年度は56件の児童書に関するレファレンス事例を追加し、平成27年3月末現在、412件を提供している。

※ <http://crd.ndl.go.jp/jp/public/>

○外国語に翻訳刊行された日本の児童書情報

日本の児童書の海外における翻訳出版情報のデータベースである。国立国会図書館職員が調べものに有用であると判断した各種情報源を国立国会図書館ホームページで紹介するリサーチ・ナビ内で提供している。平成26年度は98件のデータを追加したが、データの重複により29件を非公開としたため、平成27年3月末現在の収録データは3,917件となった。

※ <http://rnavi.ndl.go.jp/childbook/honyaku.php>

(3) 利用者サービス

○来館利用サービス

第一資料室及び第二資料室に合計約3万冊の児童書・児童文学に関する参考図書・研究書等を排架している。また、利用者用端末を16台配備し、各端末から資料検索、書庫資料の閲覧申込み・複写申込書の作成のほか、デジタル化資料等電子情

報の閲覧が可能である。平成26年度の両室の利用者数は合計10,783名であった。

○遠隔サービス

国際子ども図書館所蔵資料の遠隔複写、図書館間貸出しの申込み及び蔵書に関する問合せに回答するレファレンスサービスを行っている。回答事例の一部はレファレンス協同データベースで紹介している。平成26年度の遠隔複写申込みは1,498件、図書館間貸出数は319点、文書によるレファレンス回答処理は147件、電話によるレファレンス回答処理は833件である。

(4) 国会サービス及び行政・司法の各部門に対するサービス

○国会サービス

調査及び立法考査局を窓口として、資料の閲覧・貸出し・複写・レファレンス等を行っている。平成26年度は137点を出納した。

○行政・司法の各部門に対するサービス

国際子ども図書館では東京本館・関西館と同様に、各府省庁及び最高裁判所に設置されている支部図書館27館に対して、資料の貸出し等を行っている。平成26年度の相互貸出し数は93点である。

1.2 子ども読書活動推進の支援

(1) 子どもの読書に関する情報発信の強化及びネットワークの構築

○子ども読書連携フォーラム

子どもの読書に関わる連携協力の促進を目指して、公共図書館職員・学校図書館職員・研究者・児童書出版社等の幅広い参加者を対象とした「子ども読書連携フォーラム」を開催した。平成26年度は平成27年3月2日に開催し、「子どもの本の選書を考える—知識の本を中心に—」をテーマに、パネルディスカッションや参加者ディスカッションを行った。参加者は83名であった。

※ 本誌49～52ページ参照

※ <http://www.kodomo.go.jp/study/cooperation/forum2/h26.html>

○「子どもの本と図書館の動き」

ホームページの「子どもの本と図書館の動き」で、国内外の主な児童文学賞、子どもの読書と図書館に関するニュース等を紹介している。平成26年度には国内外合わせて108件の情報を掲載した。

※ <http://www.kodomo.go.jp/info/child/index.html>

○「東日本大震災と子どもの読書についての情報」

平成23年4月1日から、東日本大震災と子どもの読書に関する情報へのリンク、国や図書館関連団体の動き、被災した子どもたちを支援するための活動等を紹介している。平成26年度は10件の情報を掲載した。

※ http://www.kodomo.go.jp/info/child/news_earthquake.html

(2) 人材育成支援

○児童文学連続講座「児童文学とそのマルチメディア化」

11月10日、11日に児童サービスに従事する図書館員等を対象に、児童文学に関する幅広い知識の修得を目的として実施し、47名が受講した。国立国会図書館客員調査員川端有子氏（日本女子大学教授）が本講座の監修を担当した。講座中の主な講演の演題及び講師は次のとおりである。

- 『フランダースの犬』の映画化、アニメ化、紙芝居化とベルギー
野坂 悦子（翻訳家、作家）
- スタジオジブリ版「借り暮らしのアリエッティ」は何語を話すのか—日本化した『床下の小人たち』 田中 美保子（東京女子大学准教授）
- 『若草物語』の三つの映画化—あなたはどのジョーが一番好きですか？
横川 寿美子（帝塚山学院大学教授）
- 『秘密の花園』—本から生まれた三つの映画と映画から生まれた本
川端 有子（日本女子大学教授、国立国会図書館客員調査員）
- 資料紹介—日本における児童文学と映像作品
堀 純子（資料情報課長）

※ <http://www.kodomo.go.jp/study/chair/outline/26.html>

○講師の派遣

平成26年度に、公共図書館、図書館関係団体等の依頼により、7件の研究会・研修会等の講師として、延べ7名の職員を派遣した。

○平成26年度図書館情報学実習生の受入れ

公募により選考した、京都ノートルダム女子大学と同志社大学の実習生計2名を9月2日から11日にかけて受け入れ、カウンター業務、選書、装備・排架、レファレンスサービス、読み聞かせ等の実習を行った。

(3) 学校図書館支援

○学校図書館セット貸出し

「国際理解」をテーマとする児童書等約50冊を1セットとし、全国の学校図書館へ貸し出している。ホームページに全17種類の各セットの資料のリストや解題を掲載し、セットを使った学校図書館活動や学習・読書活動の事例を全国から集め紹介している。平成26年度は248校に計11,602冊の資料を貸し出した。そのうち、東日本大震災の被災地支援として、被災地域の学校56校に計2,630冊を往復送料無料で貸し出した。また、子どもたちが推薦する本を紹介した手紙を同封し、次に利用する学校にセットと共に届ける読書郵便を82校へ送付した。

○中高生向け調べものの部屋の準備調査プロジェクト講演会

平成27年度開室予定の中高生向け「調べものの部屋」の開室準備に資するため、7月6日に成田喜一郎氏（東京学芸大学教職大学院副院長）と中村百合子氏（立教大学准教授）による講演会「子どもの探究活動と図書館の可能性」を開催した。参加者は70名であった。

※ <http://www.kodomo.go.jp/promote/school/room-lecture.html>

2. 子どもと本のふれあいの場としての活動

2.1 子どもの成長段階に応じた館内サービス

○子どものためのおはなし会

毎週土曜日・日曜日の午後2時（4歳～小学1年生）及び午後3時（小学2年生

以上)に「おはなしのへや」で実施している。職員がストーリーテリングと絵本の読み聞かせ等を行っている。平成26年度は計180回実施し、1,220名が参加した。

○ちいさな子どものためのわらべうたと絵本の会

3歳以下の子どもと保護者を対象として、第2水曜日及び第3土曜日午前11時から「おはなしのへや」で実施している。職員が、参加者の年齢に合わせ、絵本の読み聞かせとわらべうたを組み合わせで行っている。平成26年度は合計22回実施し、279組591名が参加した。

○夏休み読書キャンペーン

夏休みに子どもが様々な本に出会うための企画として、本を読んで問題に答える、初級編・中級編・上級編の3種類のクイズを用意し、「子どものへや」で実施した。886名の子どもが参加した。

○中高生のための『国立国会図書館の仕事』紹介

当館職員による仕事紹介と館内見学を組み合わせた講座を実施した。7月23日に中学生向けプログラムを当館で、7月30日に高校生向けプログラムを東京本館で行い、計37名の参加があった。

○科学あそび2014

子どもの科学と科学の本への興味を育てるため、7月26日、27日に当館3階ホールで小学生以上を対象に、科学読み物研究会の原田佐和子氏を講師に迎え、「のびてちぢむだけじゃない！～実験で広がるゴムの世界～」をテーマとして計2回実施した。参加者は、ゴムの性質を確かめる実験を行い、その後、



ねじったゴムが元に戻ろうとする力を利用して動く「じたばたカップ」を作成した。実験終了後、職員がブックトークでゴムの歴史や性質の分かる本を紹介し、関連する絵本の読み聞かせも行った。小学生計72名の参加があった。

※ <http://www.kodomo.go.jp/promote/activity/science/2014/index.html>

○夏休み小学生向け図書館見学ツアー

7月31日、8月7日、14日、21日、28日の午後2時から3時まで、小学生向けの図書館見学ツアーを行った。内容は、館内見学と質疑応答及び短縮版のおはなし会で、計110名の参加があった。

○子どものためのおたのしみ会

通常のおはなし会の特別版として、5月と12月に行った。5月5日には、大型絵本の読み聞かせを含む「こどもの日おたのしみ会」を2回実施し、計67名が参加した。



12月7日には、上野動物園との協力により「冬のおたのしみ会」を実施し、43名が参加した。テーマを「クマ」とし、当館職員がクマを題材とした絵本の読み聞かせをした後、上野動物園の飼育員が写真を見せながらクマの生態について解説した。また、当館が作成したクマや動物園に関するブックリストを、おたのしみ会参加者のほか上野動物園来園者にも配布した。

○子どものための音楽会

公益財団法人東京都歴史文化財団東京文化会館との共催で、「Music Weeks in TOKYO 2014 まちなかコンサート～芸術の秋、音楽さんぽ～」の一環として10月19日に2回実施し、計323名の参加があった。子どもが親しみやすい曲を選んで、木管四重奏の演奏を行った。また、演奏終了後に職員が音楽に関する本のブックトークを行い、その中で絵本の読み聞かせも行った。

○子どものための絵本と音楽の会

東京・春・音楽祭実行委員会と共催で、平成27年3月22日に4回実施し、計497名の参加があった。クロケット・ジョンソン作の絵本『はろるどまほうのくにへ』

の朗読に合わせて、絵本のイメージで作曲・編曲された音楽をヴァイオリンとチェロの生演奏で楽しんだ。

○子どもの見学

幼稚園・保育園・小中学校、高等学校等、団体向けの見学を行っている。小学生向けには見学とおはなし会を体験するプログラム、中高生向けには職業インタビューを中心とするプログラムでそれぞれ行った。平成26年度は、計61件1,302名の参加があった。

2.2 子ども向けの情報発信

ウェブ上の子どもと本のふれあいの場として公開する「国立国会図書館キッズページ」の「図書館員の日」、「よんでみる？」のコーナーにコンテンツを追加した。

※ <http://www.kodomo.go.jp/kids/index.html>

3. 子どもの本のミュージアムとしての活動

3.1 館内展示

○日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み

標記展示会を平成23年2月19日から当館3階「本のミュージアム」で開催している。平成26年度は、計284日開室し、入場者数は52,942名であった。

当館所蔵資料の中から、明治から現代に至るまでの代表的な日本の児童文学作家・画家の作品、子どもが児童文学に接する一つの機会である教科書及び教科書掲載作品、童謡作品等、全体で約270点を展示した。特別コーナーにおける展示のテーマ・内容は次のとおりであった。

- テーマ：21世紀の子どもの本

その1 絵本（11月30日まで）

その2 児童文学（12月2日から）

関連催物と開催日、参加者数は次のとおりであった。

- ギャラリートーク

5月24日、10月4日、12月6日に実施し、参加者は計60名であった。

- 講演会「きょうの絵本 あしたの絵本—希望のかたちを求めて—」

6月21日、当館3階ホールにおいて、広松由希子氏（絵本評論家、作家）及び宮川健郎氏（武蔵野大学教授）による標記講演会を実施した。参加者は86名であった。

○絵本で知る世界の国々—IFLA からのおくりもの

当館3階ホールにおいて、4月22日から5月25日まで計26日開催し、入場者数は5,265名であった。展示資料は、国際図書館連盟（IFLA）の「絵本で世界を知ろうプロジェクト」により集められ、当館に寄贈された。約30の国や地域の図書館員が選んだ、その国の代表的な絵本約260冊で、来場者が手に取って見られる形で展示した。日本国内及びアジア・オセアニア地域へのセット貸出しも行っている。

※ <http://www.kodomo.go.jp/event/exhibition/tenji2014-02.html>

○世界のバリアフリー—絵本展2013—国際児童図書評議会2013年推薦図書展

当館3階ホールにおいて、7月29日から8月24日まで計23日開催し、入場者数は5,364名であった。国際児童図書評議会（IBBY）の日本支部である日本国際児童図書評議会（JBBY）との共催で、障害のある子どもたちも楽しめるように作製されたバリアフリー図書の中から、IBBY 障害児図書資料センターが2013年に選定した世界23か国の60作品を、手に取って見られるよう展示した。

○子どもを健やかに育てる本2013—厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財（出版物）

当館3階ホールにおいて、平成27年1月27日から2月22日まで計22日開催し、入場者数は3,122名であった。厚生労働省雇用均等・児童家庭局との共催で、児童の福祉の向上に役立てることを目的として厚生労働省社会保障審議会が推薦した絵本や図書61タイトルを、手に取って見られる形で展示した。

○資料室での小展示

第一資料室では、当館開催展示会に関連した小展示を2回実施し、利用者の興味・関心を深める一助とした。また、平成25年に日本国内の主要な児童文学賞を受賞した作品及び児童サービスの基本資料を展示した。

第二資料室では、当館所蔵外国刊行資料から、「お菓子の絵本」など利用者が親しみやすいテーマで児童書を中心に資料を選び、小展示を5回実施した。

○子どものへやでの小展示

「子どものへや」では季節や子どもの興味を引くテーマで、「世界を知るへや」では主に開催中の展示会に関連させて小展示を行い、子どもたちが何度訪れても楽しめる工夫をしている。平成26年度は「子どものへや」で12回、「世界を知るへや」で2回行った。

3.2 電子展示

○日本の子どもの文学—国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み

当館3階「本のミュージアム」で平成23年2月19日から開催している同じ名称の実物資料の展示会に出展された作品中の約220点の画像を、電子展示会として4月23日にインターネットで公開したもの。出展資料の一部は、「国立国会図書館デジタルコレクション」(<http://dl.ndl.go.jp/>)で、全文をデジタル画像で閲覧できる。

※ <http://www.kodomo.go.jp/jcl/index.html>

○中高生のための幕末・明治の日本の歴史事典

日本の近代史をテーマに、「国立国会図書館デジタルコレクション」や「近代日本人の肖像」等で公開している画像を活用し、中高生向けの解説をつけた標記コンテンツを作成し、6月20日に公開した。中高生に興味を持ってもらえるよう、表示にも工夫をした。

※ 本誌53ページ参照

※ <http://www.kodomo.go.jp/yareki/index.html>

4. 内外諸機関との連携・協力、広報活動等

○絵本で紹介するラトビア

4月13日、駐日ラトビア大使館との共催で、ラトビア及びラトビアの絵本を紹介し、併せて、折り紙を楽しむイベントを実施した。150名の参加があった。

○第12回国際子ども図書館連絡会議

当館の平成25年度の活動及び平成26年度の取組について報告し、各機関の取組に関する報告及び意見交換を行う標記会議を6月18日に開催した。

大阪国際児童文学振興財団、大阪府立中央図書館、国際子ども図書館を考える全国連絡会、国立教育政策研究所社会教育実践研究センター、国立青少年教育振興機構教育事業部、全国学校図書館協議会、東京子ども図書館、読書推進運動協議会、日本国際児童図書評議会、日本児童図書出版協会、日本図書館協会、ブックスタート、文部科学省スポーツ・青少年局の13機関・団体から代表者23名が参加した。意見交換において、当館に対する主な要望として、国際的な調査研究、学校図書館への支援、公共図書館で児童サービスに従事する初任者への研修等の実施が挙げられた。

○講演会の実施

●講演会「私が子ども時代に出会った本—浅田次郎」

講師：浅田次郎氏（作家、日本ペンクラブ会長）

日本ペンクラブとの共催により、標記講演会を4月19日に当館3階ホールで実施した。参加者は99名であった。浅田氏は、子どもの頃に読んだ作品を紹介し、子どもには、勉強としてではなく、楽しみとしての読書が重要であると語った。特に、子どもの想像力を育むためには実用書ばかりでなく、小説を読むことが大切であると述べ、最後に、現代社会では多様化する娯楽等に読書の時間を奪われているとし、読書にゆっくりと時間を使える社会を作りたいと訴えて講演を終了した。

●講演会「シリーズ・いま、世界の子どもの本は？」（第8回）

「いま、スペイン語圏の子どもの本は？」

講師：宇野和美氏（翻訳家）

日本ペンクラブとの共催により、標記講演会を10月11日に当館3階ホールで実施した。参加者は72名であった。宇野氏は、スペイン語圏に属する地域の範囲や歴史について説明した後、「20世紀半ばまでの子どもの本の状況」、「日本ではどんな本が紹介されてきたか」、「1980年以降の子どもの本の変遷」、「スペイン語圏の独自性」という構成で、歴史・文化的な背景に触れつつ、約100点の資料を紹介した。

※ 本誌3～15ページ参照

●講演会「わたしの物語作法―「古き」ベルリンの若者たちの今」**講師：クラウス・コルドン氏（ドイツ児童文学作家）****酒寄進一氏（ドイツ文学者、翻訳家、和光大学教授）****通訳：マライ・メントライン氏（エッセイスト、通訳・翻訳者）**

大阪府立中央図書館及び大阪国際児童文学振興財団と共催で、11月29日に当館で、11月30日に大阪府立中央図書館で標記講演会を開催した。参加者数は合計で204名であった。コルドン氏は自身の作品の中でも特にベルリン3部作を含む歴史小説を取り上げ、自身とベルリンの歴史との関わり、取材法を含めた自身の執筆手法、また、子どもたちが歴史に学び、未来を果敢に変革して行ってほしいという作品に込めた思いについて語った。

※ 本誌36～48ページ参照

○国立科学博物館「教員のための博物館の日」への参加

8月1日、2日に国立科学博物館で開催された「教員のための博物館の日2014」に参加した。国際子ども図書館のブースで学校図書館サービス等の事業を紹介したほか、国際子ども図書館見学会を実施した。

○図書館総合展への参加

11月5日から7日まで、主要な図書館関係団体・企業等約160団体が参加する第16回図書館総合展（会場：パシフィコ横浜）に参加し、国立国会図書館の展示ブースにおいて国際子ども図書館について紹介した。

○一般向けの見学

個人向けのガイドツアーを毎週火・木曜日に行っているほか、団体向けの見学を行っている。平成26年度は、個人向け97件788名、団体向け34件616名の参加があった。

○平成26年度に刊行した主な刊行物

- 『国際子ども図書館の窓』第14号（2014年9月）

※ http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8747103_po_2014-mado.pdf?contentNo=1/

- 『平成25年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録「英米児童文学をめぐる時代と環境」』（2014年10月）
- ※ http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8747104_po_H25.pdf?contentNo=1/
- 国際子ども図書館メールマガジン 71～85号（2014年4月～2015年3月）
- ※ <http://www.kodomo.go.jp/about/mailmagazine/2014/index.html>

5. 施設及びサービスの拡充に向けた準備

平成24年春に建築を開始した増築棟は、平成26年度中も順調に工事が実施された。増築棟の名称を、弧を描く建物の外観から、「アーチ棟」とし、帝国図書館時代の施設を受け継ぐ既存棟の名称を、「レンガ棟」とした。

アーチ棟は、地上3階、地下2階、延床面積6,200㎡の規模である。地下1階・2階は約65万冊収蔵の書庫となり、既存のレンガ棟書庫と合わせて、約100万冊の収蔵が可能となる。アーチ棟の2階には、レンガ棟の第一・第二資料室を統合して「児童書研究資料室」を設置し、これにより、調査研究のための専門図書館としての機能強化を図る。また、1階には、講演会・各種研修・子どものための催しなどを開催する研修室を、3階には事務室を設置する。

レンガ棟2階には、中高生の調べものに対応する資料を開架する「調べものの部屋」、資料を手にとって見ることができる「児童書ギャラリー」、1階には「休憩・飲食・授乳スペース」を新設する。

また、増築・改修工事後のサービスの在り方に関する基本文書としては次の文書を策定しているので参照されたい。

- ※ 国際子ども図書館第二次基本計画 <http://www.kodomo.go.jp/about/law/basicplan2.html>
- ※ 新館建設計画 <http://www.kodomo.go.jp/about/future/design.html>
- ※ 国立国会図書館国際子ども図書館子どもの読書活動推進支援計画 2015
<http://www.kodomo.go.jp/promote/suishin2015.html>

なお、リニューアルに関する詳細を当館ホームページ「2015-2016年国際子ども図書館リニューアル！」に掲載した。

- ※ <http://www.kodomo.go.jp/about/future/renewal2016/pdf/renewal2015-2016.pdf>

数字で見る！国際子ども図書館

(平成26年4月1日～平成27年3月31日)

(1) 国際子ども図書館所蔵統計(平成27年3月31日現在)

資料区分				所蔵数		
資料 情報 課	図書 (単位：冊)	日本語	児童書(*1)	260,427		
			児童書関連書、参考図書		19,024	
			小計		279,451	
		外国語	児童書(*1)	欧米言語	60,566	
				アジア言語	27,755	
			児童書関連参考書		5,084	
		小計		93,405		
	計		372,856			
	逐次刊行物 (単位： タイトル)	雑誌	日本語	児童雑誌	1,576	
				児童関連誌		812
			外国語	児童雑誌	欧米言語	46
					アジア言語	25
		児童関連誌	欧米言語	100		
			アジア言語	13		
		小計		2,572		
	新聞	日本語	10			
		外国語	1			
非図書資料 (*2) (単位：点)	静止画、紙芝居(*3)			2,441		
	カード、カルタ(*3)			222		
	マイクロフィルム			2,076		
	マイクロフィッシュ			35,924		
	録音資料(CD、カセットテープ等)(*4)			2,484		
	映像資料(ビデオテープ、ビデオディスク等)			7,632		
	電子資料(光ディスク、磁気ディスク等)			6,548		
児童 サービス課	開架閲覧用資料(単位：点)			23,947		
	貸出用資料(単位：点)			5,658		

*1 学校教科書、教師用教科書、学習参考書、楽譜(冊子)、組み合わせ資料を含む。

*2 教師用指導書、児童書関連書のうち非図書形態のものを含む。

*3 タイトル数で集計。

*4 教師用指導書のみ(児童書音楽資料は未所蔵。)

(2) 来館者統計

開館日 (日)	284
来館者 (人)	102,368
(うち中学生以下)	(17,714)

(4) 資料出納統計

国会サービス (点)	137
第一・第二資料室 (点)	19,824

(3) 各室利用統計

第一資料室	開室日 (日)	236
	利用者 (人)	7,313
第二資料室	開室日 (日)	236
	利用者 (人)	3,470
子どものへや・ 世界を知るへや	開室日 (日)	284
	利用者 (人)	55,126
	(うち中学生以下)	(16,487)
メディアふれあ いコーナー	開室日 (日)	284
	利用者 (人)	41,429

(5) 複写サービス統計

(対象：国会サービス)

紙	件	0
	枚	0
プリント アウト	件	0
	枚	0
マイクロ	件	0
	フィルム(コマ)	0
	フィッシュ(枚)	0

(対象：一般)

紙	件	5,684
	枚	30,084
プリント アウト	件	555
	枚	16,136
マイクロ	件	0
	フィルム(コマ)	0
	フィッシュ(枚)	0

(6) 資料貸出統計

(対象：行政・司法各部門)

相互貸出し (点)	93
-----------	----

(対象：一般)

図書館間貸出し	点	319
学校図書館セット貸出し	件	248
	点	11,602
展示会出品資料貸出し	件	6
	点	1,473

(7) レファレンスサービス統計①

(対象：一般)

文書回答	処理文書 (通)	90
	処理 (件)	147
電話回答	受理 (件)	600
	(うち18歳未満)	(3)
	処理 (件)	833
	(うち18歳未満)	(3)
口頭回答	受理 (件)	11,275
	(うち18歳未満)	(969)
	処理 (件)	14,171
	(うち18歳未満)	(1,305)

(7) レファレンスサービス統計②

(対象：国会サービス)

文書回答	処理文書(通)	0
	処理(件)	0
電話回答	受理(件)	0
	処理(件)	0
口頭回答	受理(件)	0
	処理(件)	0
調査局経由※	処理(件)	0

(対象：行政・司法各部門)

文書回答	処理文書(通)	0
	処理(件)	0
電話回答	受理(件)	0
	処理(件)	0
口頭回答	受理(件)	0
	処理(件)	0

※調査及び立法考査局で受付後、回付されたもの。

(8) 参観・見学統計

国会議員、前・元議員		件	0
		人	0
その他の国会関係者		件	0
		人	0
行政・司法		件	2
		人	16
国内	個人	件	97
		人	788
		(うち18歳未満)	(20)
	団体	件	95
		人	1,918
		(うち18歳未満)	(1,360)
	図書館関係者	件	7
		人	53
		(うち18歳未満)	(0)
	地方自治体・地方議会関係者	件	2
		人	11
		(うち18歳未満)	(0)
海外(外国公館関係者を含む)		件	11
		人	43
		(うち18歳未満)	(0)

(9) 国際子ども図書館ホームページアクセス統計

http://www.kodomo.go.jp/以下の全コンテンツ	ページビュー(件)	2,581,998
トップページ	トップページへのアクセス(件)	318,210

国際子ども図書館利用案内

国際子ども図書館ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>

電話 03 (3827) 2053 (代表) 03 (3827) 2069 (録音による利用案内)

☆来館利用 ホームページ > 利用案内

問合せ先：企画協力課

開館時間：9:30～17:00 資料請求：9:30～16:30 (児童書研究資料室)

複写受付：10:00～16:00 (後日郵送複写のみ16:30まで)

休館日：月曜日、国民の祝日・休日 (こどもの日は開館)、年末年始、毎月第3水曜日

所蔵資料：国内刊行児童図書・雑誌、外国語の児童図書・雑誌、児童書関連図書・雑誌等

※資料の利用は館内のみ。館外への帯出はできません。

☆レファレンス・資料案内 ホームページ > 本・資料を探す>レファレンス・サービス

問合せ先：資料情報課情報サービス係

申込方法：来館、文書 (図書館経由)、電話

※児童書・児童文学、児童図書館活動等に関する問合せに答えます。

※資料を直接確認しなければならない等時間を要する調査や、聞き間違いが生じやすい外国語文献についてのレファレンスなどは文書で申し込んでください。

☆資料の複写 (有料) ホームページ > 利用案内 > 複写サービス

問合せ先：資料情報課情報サービス係

申込方法：来館、NDL-OPAC 経由 (登録利用者・機関のみ)、郵送 (登録利用者・機関のみ)

☆資料の図書館間貸出し ホームページ > 利用案内 > 図書館間貸出し

問合せ先：資料情報課情報サービス係

※「図書館間貸出制度」に加入している図書館のみ利用できます。

※雑誌や昭和25年以前刊行の図書など貸出しできない資料もあります。

☆見学・ツアー ホームページ > 利用案内 > 見学・ツアー

問合せ先：企画協力課企画広報係 (一般向け)、児童サービス課 (児童・生徒向け)

☆学校図書館セット貸出し ホームページ > 子どもの読書活動推進 >

学校・学校図書館へのサービス > 学校図書館セット貸出し

問合せ先：児童サービス課児童サービス企画係

※「国際理解」をテーマとする児童書約50冊を学校図書館に貸し出します。

※セットに含まれる資料の解題をホームページに掲載しています。

国際子ども図書館の窓 第15号 2015.9

発行所 国立国会図書館 **国際子ども図書館** 2015年9月25日発行
編集責任者 佐藤 毅彦
〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電 話 03 (3827) 2053 (代表) FAX 03 (3827) 2043
印刷所 株式会社 山越

本誌掲載論文等のうち意見にわたる部分はそれぞれの筆者の個人的見解です。

本誌掲載記事を全文又は長文にわたり抜粋して転載する場合には、事前に国際子ども図書館企画協力課に御連絡ください。



The Window

the Journal of the International Library of Children's Literature
No.015 September 2015

Contents

【Research reports】

What's happening with children's books in Spain?	= Kazumi Uno	3
Children's books in Peru	= Yumi Hoshino	16
Reports of official trip abroad: children's books in the Middle East and Central Asia	= Naoki Yamamoto	26

【Highlights】

Support Plan for the Promotion of Children's Reading Activities 2015	= International Library of Children's Literature	33
Lecture: My way of writing - young people today in the "old" Berlin	= Planning and Cooperation Division	36
Kaleidoscope of life in history as written by Klaus Kordon	= Shinichi Sakayori	39
German children and Klaus Kordon	= Marei Mentlein	45
The Cooperation Forum on Children's Reading in FY2014	= Children's Services Division	49
Digital exhibition "Teenagers' encyclopedia of the history of Japan during the late Edo and Meiji periods" now available	= Children's Services Division	53
Introduction to useful databases for searching children's books	= Resources and Information Division	54

【International exchange】

The 80th IFLA General Conference	= Hatsuki Nishio	59
The 34th IBBY World Congress	= Takehiko Sato	63
Children's services of public libraries in Italy	= Naoko Nakajima	65

【List of events and activities; April 2014 – March 2015】

【ILCL activity report】

【ILCL in figures】

【ILCL user guide】

International Library of Children's Literature, National Diet Library,
Tokyo